

水の文化

特集

日々、拭く。





拭^{ぬぐ}う

建築史家 建築家 藤森照信



建築工事の中では水は嫌われ者で、水を使わぬやり方を「乾式工法」と呼び、戦後の主流となってきた。割を食ったのは左官で、戦前までは仕上げの主役だったのに、戦後は壁紙やボードや合板に代わられて久しい。

左官が嫌われた理由は簡単で、水を使うから周囲がベタベタし、その間、他の工事は止めなければいけないし、乾くまで何日もかかるから。

近年は左官仕事の味わい深さが再評価され、土や漆喰も少しずつ現場に戻ってきているが、それでも工事の主流は乾式。

水という物質は、木や土や鉄などにくらべ、身近な割にはよほど扱いにくいらしい。

このことは、我が家の台所と洗面所を見ても明らかで、配偶者が日夜掃除にこれ努め、たいていのものはピカピカに磨き上げられている中で、手拭^{てぬぐ}いだ

けがだらしくダラリと垂れている。

もちろん手を拭くためだが、なぜか昔も今も手を拭くには手拭いが欠かせない。もっとシャンとして美しい手拭き用具が現れてもよさそうだが、手拭いの優位は変わらない。昔も今も材料は木綿。

手に着いた水分を取り去るには、木綿で拭くしかなく、よって台所と洗面所にはダラリ。時には汚れてダラリ。

最新の技術を投入すればなんとかなるのでは、と考えても、車を見ると諦めるしかない。車は、鉄に代わってプラスチックが、ガソリンに代わって電気モーターが、人の手に代わってコンピュータが運転する日も近いらしいが、フロントガラスのワイパーはどうだろうか。

人が手で窓ガラスを拭くように、金属製のアーム(腕)がせつせと水滴を取り除き、産業革命感がそこだけにあふ

れている。いつワイパーが取り付けられたか知らないが、以来、技術革新がなかった唯一の箇所ではあるまいか。

「あるまいか」ではなく「ある」が正しいと確信したのは、アメリカのスペースシャトルの着陸をテレビで見た時だった。なんと、スペースシャトルの操縦席のフロントガラスには小さなワイパーが顔を出していた。NASA技術陣をしても代わりが無かったのだろう。スペースシャトルもわが家の台所と同じ。

現代の産業で少しの汚れも許されない場所をキレイにするには、最後は布で拭きとるし、もし凸凹があれば、人の手によるしかない。

最も身近で最も扱いにくい水を、ちゃんと扱うことのできるのが布と人の手というのはうれしい。水は古来、水のままだが、その扱う用具も、古来、ダラリ。

藤森照信(ふじもり てるのぶ)

1946年長野県生まれ。1971年、東北大学工学部建築学科卒業。東京大学大学院および生産技術研究所で村松貞次郎に師事し、近代日本建築史を研究。工学博士。主な著書に「日本の近代建築」(岩波書店 1993)『人類と建築の歴史』(筑摩書房 2005)ほか。「熊本県立農業大学校学生寮」(熊本県菊池郡 2000年)で日本建築学会賞作品賞を受賞。



水を湛えたブリキのバケツと濡れ雑巾。水を用いて布で拭くという行為は、昔からさほど変わらない 撮影協力：昭和のくらし博物館

特集

日々、拭く。

日々の生活において私たちは、さして意識せずにさまざまなものを拭いている。食事の前後には食卓を、お風呂を出たら体を拭く。花粉症ならば鼻水を紙で拭うし、最近は携帯電話やスマートフォンも拭く対象に加わった。水や水分、または汚れを取り去ってきれいにする。それが「拭く」という行為だろう。

「雑巾ぞうきん」がかつて「浄巾じょうきん」と呼ばれていたように、拭く道具は時代によって変化している。しかし、道具は変わっても、水を拭きとり、汚れを拭い去るといった行為そのものは変わらない。個人的な所作でありながらも、多くの人々が共有する「拭く」は、生活文化の一つである。

そんな身近な「拭く」という行為について考えたことがあっただろうか？ その本質とはいったい何なのか。そして「拭く」と水はどのような関係にあるのか、生活様式や道具の変遷、さらに行為に宿る精神性などから「拭く」を読み解いていく。

目次

巻頭エッセイ

- 2 ひとしづく拭う 藤森照信

特集 日々、拭く。

- 6 概説 「拭く」行為に宿る精神性と宗教性 山折哲雄
10 生活史 日本人はいつから「拭く」ようになったのか? 小泉和子
14 地域 「雑巾がけ」の速さを競う勇者たち Z-1 グランプリ
18 生活用品 「拭くシート」から見える日本事情 花王株式会社
22 五感 「今、ここ」へ戻るために—— 触覚体験としての「拭く」 鈴木禎宏
24 家庭紙 誰も知ろうとしなかった「拭く紙」 関野勉
28 ライフ どこを拭くか「観察」して考える 新津春子
32 現代社会 掃除の変化と「拭く」のゆくえ 永井良和
35 文化をつくる「拭く」と「水」の切り離せない関係 編集部

連載

- 36 水の文化書誌 49
生と死と共に流るるガンジス川 古賀邦雄
38 魅力づくりの教え 10
質にこだわらずにはいられない文化
香川県小豆郡小豆島 中庭光彦
42 食の風土記 10
旬の食材を地元で味わう「せりしゃぶ」 宮城県名取市&仙台市
45 Go! Go! 109水系 14
瀬戸内の風土を反映した効率的な水利用の揖保川 坂本貴啓
50 センター活動報告
51 編集後記/ご案内
(敬称略)



概説

「拭く」行為に宿る 精神性と宗教性



ガンジス川のベナレスで洗濯する人々。ベナレスはヒンドゥー教の一大聖地で、ヴァーラーナシー、バラナシとも呼ばれる(提供:アフロ)

生活するうえで、大多数の人が無意識のうちになにかしら拭いている。ならば、「拭く」行為には、水気をとる、汚れを拭い去るといったこと以外に何か意味があるのではないか——。これが今回の特集の出発点だった。そこで、まずは「拭く」という行為に宿る精神性や、その裏側に潜んでいるであろう宗教性について、山折哲雄さんにお聞きした。

「拭く」の原体験は 本堂の縁側掃除

私の実家は岩手県花巻市の浄土真宗西本願寺派の小さな寺です。小学校6年生のときに東京から疎開し、父親は私を住職の後継者にしようと、日常の修行をさせました。なかでもいちばんつらかったのは、本堂の縁側の拭き掃除です。縁側を拭いてから、長い阿弥陀経を父親と唱える。毎朝必ず、この二つの行為をしなければ朝食にありつけませんでした。

ここで「拭く」という行為を徹底的に叩き込まれたのです。昔の古い寺の縁側は、長い一枚板ではなく、短い板を貼り合わせて敷き詰めたものでした。だから、両手を雑巾に当てて腰を上げ、廊下の



インタビュー
山折哲雄さん
宗教学者／評論家

Tetsuo Yamaori
1931年(昭和6)サンフランシスコ生まれ。1954年、東北大学インド哲学科卒業。国際日本文化研究センター名誉教授(元所長)、国立歴史民俗博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授。著書に『「ひとり」の哲学』『觸體となってもかまわない』『義理と人情長谷川伸と日本人のこころ』『これを語りて日本人を戦慄せしめよ 柳田国男が言いたかったこと』など。

端から端まで一気に拭くのではなく、短い板一枚ごとに右へ左へと拭き掃除をしなければなりません。雪の降る寒い冬など特にきつかったことを覚えています。

まだ子どもですから、つらい労働から早く解放されたいとの一心でやっていました。しかし、今振り返ってみれば修行の場でした。これが私にとって「拭く」という行為の原点です。

目に見えない 穢れを叩き出す

異文化における「拭く」行為のさまざまな側面を見せつけられたのは、インドを旅したときでした。ヒンドゥー教徒にとってガンジス川の水は、肉体と靈魂を分離するほどの高い浄化力をもった、聖

なる水です。したがって火葬した骨灰や糞便も流せば、その同じ川で洗顔や洗濯もします。

洗い場の一面で不思議な光景を見ました。女性たちは洗濯物をガンジス川の水につけて汚れを洗い流した後、拭いて(水気をとって)から岩に叩きつけているのです。洗濯物を拭いては叩く、叩いては拭くの作業を繰り返している。叩けば生地が傷むだろうに、なぜそんなことをするのでしょうか。謎だったのですが、あまりこれについて考察した文献を読んだことがありません。

私なりに考えた仮説はこうです。外面的な穢れと同時に、着物に染みついた、あるいはそこに内在している目に見えない穢れを叩き出しているのではないか。だから拭き浄める行為と叩き出す行為が連

続している。拭くことを叩くことで補強している、と見ることもできるし、叩いて悪しきものを滲み出させ、それを拭きとるとも読めます。文化人類学者がこれをどう分析するか、興味ある問題です。

心の垢を拭い去る 聖地としての温泉

インドのベナレスで温泉に入ったときのこと。地下を掘り下げてつくった4m四方の湯壺まで石段を10段ほど降りていき、首くらゐまである湯に立って浸かる温泉です。しっとり毛穴に入り込んでくような、体になじんでいく湯は、日本の温泉では味わったことのない心地よさでした。足の裏に当たる砂地の感触が、これまたすばらしかった。

しばらく浸かるとみんな静かに体を拭いて石段を上がり、出ていきます。日本の温泉のように体を洗わないのです。せつけんはなく、持ち込みも禁止されています。よく見ると、出ていくとき湯壺の四隅に両手を合わせて拝んでいます。そこにあるのは、ヒンドゥー教の小さな彫刻の神像でした。

そのとき初めて気づいたのです。インド人にとって温泉とは、体の垢を洗い落とす場所ではなく、心の垢を洗い流し、拭い去る聖なる場所なのだ。

やはりインド人は内面に染み付いた穢れと外面の物理的な汚れを区別しているのだとわかりました。実は日本の温泉にも昔は同様の役割があったのです。修験道の霊場のそばには温泉があり、巡礼者は心身を浄めてからお参りしまし



約1800年前に発見されたという日本最古の温泉「湯の峰温泉(ゆのみねおんせん)」。かつて人々は熊野詣の途中にここで湯垢離(ゆごり)を行なって身を浄め、旅の疲れも癒したとされる(提供:アフロ)

拭い去る」意味があるなら、最大の穢れとは何でしょうか。それはいうまでもなく、「死」の穢れです。

平安時代、貴族政権が中国の律令制度を移入し刑法のシステムをつくったなかで最大の刑罰が死刑でした。これは国が死の穢れを地上に広げる重大な行為です。

おそらくそのことを、中国の官僚たちの方が意識していたのででしょう。死刑を規定したものの、平安時代350年間を通じて公的には一度も執行されていません。

しかし私的には執行されてきました。それを担当したのは武士でした。貴族は極度に死の穢れを嫌ったのです。平安時代まではこうした二重構造になっていました。

やがて武士政権が誕生すると、武士たちは人を殺すことで得た穢れを浄めるという重大な問題に直面したわけです。人を殺めた刀の穢れをどう拭い去るか。ここで「研ぐ」ないし「拭く」という行為が重視されます。

どんな名刀でも人を斬れば刃こぼれます。だから研磨しなければなりません。研磨技術の歴史は日本が世界でもっとも古く、旧石器時代から始まりました。世界的なベストセラーになった『銃・病

原菌・鉄』の日本語版序文で著者のジャレド・ダイアモンドは次のように述べています。

「研磨加工を施し、刃先の長い石器を最初に作ったのは日本人だった。これは、世界各地の人類がまだ石器を用い、鉄器について何も知らなかった時代のこと、ヨーロッパで石器が研磨されるようになる一萬五〇〇年以上も前のことである。」(倉骨彰訳/草思社2000)。

研ぎ拭いの伝承で 日本刀は武士の魂に

中世を通じて刀の研磨技術はどんどん進歩し、信長・秀吉から家康に至る時期に頂点を極めたのが、日本刀研磨の第一人者、本阿弥光悦でした。彼は家康に芸術村の土地の寄進を受け、陶芸や書や工芸にも才能を発揮したルネッサンス的芸術家の祖ですが、その中心を成している技芸は「研磨」だったわけです。

研ぐことによって刀の内部に染み込んだ穢れを浮き彫りにして、それを最終的に拭い去り、浄化する。こうした伝承が連続と引き継がれ、やがて「日本刀は武士の魂」という思想が誕生します。

このような歴史をもつのは世界で日本だけです。刀剣が工芸品と

して美術館や博物館で展示されるのは日本刀くらいしかないでしょう。武器として刀剣を展示しているのは世界にも多くありますが、それとはまるで扱いが違う。「武士の魂」の象徴ですから、一種の神ともいえます。日本刀を展示している世界中の美術館では、研磨のために日本へ送り返す。それで研磨が商売になっています。

「研ぎ拭い」の技術は、漆工芸など日本の職人芸のなかにもさまざまな形で入り込みました。法隆寺の宮大工も鉋(かんな)の研ぎ拭いに命をかけた弟子にも伝えていたし、「包丁一本さらしに巻いて……」の歌で知られる料理人の世界でも同じこと。それらはすべて根本を探っていくと「死の穢れを拭い去る」問題に行き着くのだと思うのです。

黒澤明監督の映画『用心棒』の最後の対決場面、仲代達矢のピストルに三船敏郎の出刃包丁が勝ちますが、私は「あれは日本人の日本刀信仰の発露だ」と冗談まじりでよく言うのです。

〈座る文化〉と 「拭く」行為

もう少し私たちの日常生活に照らして「拭く」行為を考えてみると、家のなかでもっとも穢れる

死の穢れを浄化する 刀の「研ぎ拭い」

「拭く」という行為に「穢れを



独自の工芸技術が生み出した日本刀。外国にも均整のとれた美しいフォームや合理的な造刀法、優れた研磨は見られないという(提供:アフロ)

(汚れる)場所はどこかといえ、天井や壁ではなく床でしょう。するとこれは「床に座る文化」に深く関係しています。拭くというのは、基本的に床に体を沈めてする行為です。

最近の日本人はとても背が高くになりました。背の低い私など電車に乗ると、まるで林の中にいるよ

うです。背が高くて腰高になると、あぐらや正座をしにくくなります。床に座る文化から椅子に座る文化に移り変わってきたことと、雑巾がけのような床を拭く行為が軽んじられるようになったことには、相関関係があるかもしれません。

ロダンの「考える人」。中宮寺や広隆寺にある「半跏思惟像」。どちらも座って考えています。さて「考える行為が終わったら、この二人は次にどうするでしょう？」と講義でよく学生に問いました。私の答えはこうです。「考える人」は、考えることをやめたら立って歩き出す。「半跏思惟像」は、考えることをやめたら腰を下ろして床にあぐらをかく。

西洋的な「立つ文化」と、アジア的な「座る文化」。日常生活の基本として、立つことを中心に暮らしている文化圏と、座ることを中心に暮らしている文化圏と真つ二つに分かれます。あぐらや正座は「座る」ことに直結する文化であり、椅子に腰かけるのは「立つ」ことに直結する文化です。世界全体の分布でどちらが優勢だったかといえば、「座る文化」圏の方が、そもそも多数派でした。日本も「座る文化」でしたが、近代化の優等生になり「立つ文化」へと、いち早く移行しました。

それを成し遂げたのは煎じ詰めれば教育の力ですが、行きすぎたら立ち止まり、見失いがちな価値を少しばかり取り戻すのも、やはり教育の力でしょう。

「座る文化」に由来する雑巾がけも、近代化とともに失くした習慣の一つ。一時期、清掃を外注する学校が増えましたが、最近では生徒に雑巾がけをさせる小学校が復活してきているようで、よい傾向だと思えます。

穢れを拭きとるなかで生まれた発酵文化

神道的な禊みそぎは、どちらかといえば外面に付いた穢れを洗い流し、拭きとる行為です。一方で仏教的な考え方からすると穢れは内面化するもので、繰り返し修行として「拭く」行為をしなければなりません。それが寺における拭き掃除、雑巾がけであり、心の穢れを拭きとることに結び付いています。

しかし日本人の信仰心ないし精神構造の基底には、神仏習合の世界観があります。神道か仏教かの



飛鳥時代における彫刻の最高傑作とされる中宮寺の国宝『菩薩半跏像(ぼさつはんかぞう)』(伝如意輪観世音菩薩)提供:中宮寺/撮影:飛鳥園

二者択一ではありません。互いに補完し合うのが日本文化です。

先に述べたように日本の温泉もかつては外面と内面の穢れを同時に洗い流し、拭い去る場所でしたが、一方で世界に冠たる日本人の風呂好きは、モンスーン地帯の発酵文化の影響でしょう。湿度がとても高いので、毎日風呂に入らないといられない。これは酒、みそ、しょうゆ、酢、納豆……などの発酵文化とも深くかかわっています。発酵とは腐敗していくものを純化する技術です。例えば酒は、いかなれば穀物を腐らせることよって、最終的に純正な液体を抽出したものです。こうした発酵のプロセスが穢れから清浄な物を生み出します。したがって発酵のしようによつては、発酵自体が穢れを拭きとる過程であるともいえるわけです。

(2017年11月16日取材)



概説



日本人はいつから「拭く」ようになったのか？

インタビュー

小泉和子さん

生活史研究家
昭和のくらし博物館 館長
重要文化財 熊谷家住宅館長
家具道具室内史学会 会長



Kazuko Koizumi

1933年東京生まれ。女子美大で洋画を学び、卒業後は家具製作会社に入社。1970年に東京大学工学部建築学科の研究生となり、日本家具・室内意匠史を研究。工学博士。1971年生活史研究所を設立。1999年より東京都大田区の生家を「昭和のくらし博物館」として公開。「船簞笥の研究」「昭和くらし方」「和家具」「道具が語る生活史」など著書多数。

拭く道具は時代とともに移り変わる。今のようによく拭く雑巾が登場するのは、畳が敷き詰められた書院造が登場した室町末期という。しかも当時は「浄巾」と呼ばれており、雑巾と呼ぶようになったのは木綿が普及した江戸時代以降とされる。この歴史を『道具が語る生活史』で解き明かしたのは、生活史研究家の小泉和子さんだ。「拭く」にまつわる道具や生活習慣の変遷について語っていただいた。

中世までは棒雑巾が活躍

私の母は、家中いたるところに雑巾を置いていました。家の上がる時にはさつと足裏を拭い、あるいは柵や棧などに少しでも汚れを見つげると、その場ですぐに拭いてきれいにしていました。日常生活に「拭く」という行為があったりまえのように組み込まれていたのです。

では、日本人はいつから「拭く」ようになったのでしょうか。縄文時代の貝塚が各地で発見されていることから見ても、ごみをひと所に集め、身の回りをきれいに

するといふ掃除の文化は、古くから日本にあったのだらうと思われま。ただし、縄文時代に拭き掃除をしていたかどうかはわかりません。

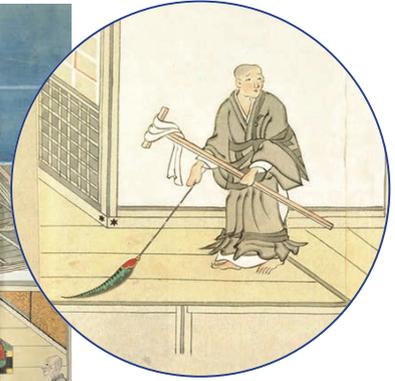
記録としてさかのぼれるのは、平安時代になります。『扇面法華経』という12世紀の装飾経には、棒雑巾で貴族邸を掃除する舎人の姿が描かれています。棒雑巾が何と呼ばれていたかは不明ですが、長柄の先にT字型の横木がついていて、そこに50〜60cmほどありそうな長い布を挟んだものです。池にせり出した板縁の上で使っています。おそらく桶（当時は曲物）の水に浸して拭き掃除に使用していたのではないのでしょうか。

このように古代の雑巾は、意外にも手で直接持つて拭くものではなく、現代のモップのような形状でした。それは当時の建築様式と関係していると考えられます。掃除などしたのは宮殿か貴族住宅だけでしたが、いずれも土間か板の間でした。平安時代の貴族邸の建物は「寝殿造」といって壁がほとんどなく、床板を張った広間に柱だけが並ぶ開放的な構造で、屏風や簾などで必要に応じて空間を仕切って利用していたのです。このがらんとした広い板敷きの広間を掃除するには、棒雑巾で走り回るのが合理的だったわけです。ちなみに『扇面法華経』の同じ絵のなかで、もう一人は鳥の羽を

束ねた羽箒を使って床を掃いています。箒の語源は「羽掃き」ですから、これがまさに箒の原形でしょう。時代を少し下った14世紀の『春日権現験記』にも、棒雑巾と雉の羽だと思われる羽箒を両手に持つ僧が描かれています。羽箒と棒雑巾が、古代から中世にかけて掃除道具の2点セットだったことが窺えます。

拭き掃除を変えた書院造の登場

鎌倉時代になると、仏教寺院において掃除が重要な意味をもつようになります。もともとはインドで、一心に掃除をすることが悟り



『春日権現験記』第16軸(板橋貴雄[模写])
1870年(明治3)(国立国会図書館蔵)
『春日権現験記』は春日大社創建の由来と
靈験を描いた鎌倉時代の代表的絵巻物。高
階隆兼が描き、1309年(延慶2)、春日大社
に奉納された。長柄の拭布「棒雑巾」と羽箒
(はねぼうき)を持つ寺僧が描かれている



『扇面法華経』や『春日権現験
記』をもとに小泉和子さんが考
案・監修して復元された「棒雑
巾」と「羽箒」。大阪府吹田市の
「ダスキンミュージアム」に展示
されている
撮影協力:ダスキンミュージアム



棒雑巾の構造を説明する小泉さん

つながるといふ思想が起こりま
した。その思想が中国に渡って、
中国の寺院に掃除が習慣として根
づき、それが天台宗の最澄や曹洞
宗の道元によって、日本にもち込
まれたのです。

福井県の曹洞宗大本山・永平寺
では、「一掃除 二座禪 三看経」
というほど、掃除が重視されてい
るそうです。雲水たちが酷寒の早
朝、長い廊下を中腰で勢いよく雑
巾がけする姿は、今日でもよく知
られています。ただし、これも鎌
倉時代にはやはり棒雑巾だったの
だろうと思います。それが、江戸
時代ごろから手持ちの雑巾に代わ
ったのでしょうか。

手持ちの雑巾が広く使われはじ
めたのは、おそらく室町時代から
江戸時代にかけてのことです。室
町後期、武家屋敷などは「書院
造」の建築様式が主流になってき
ました。書院造は寝殿造と違って、
襖や障子で部屋が仕切られ、畳敷
きで、床の間や違い棚などの造作
も見られるようになります。こう
なると棒雑巾で大雑把に掃除する
わけにはいきません。細かく拭け
る手持ちの雑巾の方が、使い勝手
がよいのです。

このころの文献に、掃除する布
として「浄巾」という言葉が初め
て出てきます。浄巾は禅林用語で

てぬぐ
手拭いを意味します。顔や手を拭
く手拭いは「タノゴヒ」と呼ばれ、
古くから使われていましたが、拭
き掃除の機会が増え、本来の手拭
いと分けて掃除用の布を表す新し
い名称が必要になって、浄巾とい
う言葉が広まっていったのだと考
えられます。ちょうどこの時代、
日本は一種の技術革新期で、従来
にない新しいものに禅林用語から
名前をつけるのが流行でした。
炬燵、暖簾などの言葉もこの時期
に禅林用語から誕生しています。

木綿の普及で 「浄巾」が「雑巾」へ

江戸時代になって、一般の住宅
にも書院造が普及すると、掃除に
対する人々の関心が高まり、掃除
の仕方も丁寧になっていきました。
柱や廊下までピカピカに磨きあげ
るのがよしとされ、掃除が行き届
かない家はだらしないと非難され
ました。中世以来の禅宗の掃除文
化の影響もあり、掃除が道徳的な
生活規範としての意味合いを強く
もつようになるのです。

そうしたなか、拭き掃除も日常
的になっていきます。雑巾がけが
一般化するにあたっては、素材の
変化も大きなポイントとなりました。
それまでは棒雑巾も含め、布



ダスキンミュージアムに展示されている「刺子雑巾」。木綿の古布(ふるぎれ)を数枚重ねて刺子にするのが雑巾の原型。これも小泉和子さんが監修した
撮影協力:ダスキンミュージアム



『日本風俗図絵』第4輯(黒川真道 編/日本風俗図絵刊行会) 1915年(大正4)(国立国会図書館蔵)
『日本風俗図絵』は、近世浮世絵の絵師が描いた代表的な作品を国学者である黒川真道が編集したもの。したがって江戸時代にはこのような雑巾がけがあったことがわかる。「かげうつる、かがみのごとく、板の間に、ちりすへぬこそ、よき掃除なれ」という文章が添えられている

といえほとんどが麻や椿つばきなど、布にするのに大変手間がかかるものでした。しかし、江戸時代に安価な木綿が回るようになり、着物やふとんなどで使い古した木綿をほどこいて縫い合わせ、掃除に利用するようになったのです。雑多なぼろ布を無駄にせず使うことから、その呼び名も「浄巾」から「雑巾」へと変わっていきました。

江戸市内の排泄物などは、幕府公認の処理業者が収集、運搬するしくみができあがっていました。また、公共の橋や道路、下水路などをこまめに掃除するよう町人に義務づける町触(法令)も出されています。こうした公的枠組みと人々の掃除に対する意識の高さから、江戸は世界でも類を見ない衛

生的な都市として発展したのです。

国によって異なる 学校教育と掃除

江戸時代に浸透した掃除の習慣やその教育的な意義は、そのまま近代へと受け継がれていきます。近代の掃除のあり方を象徴するのが、学校における掃除教育ではないでしょうか。

明治時代になると、細菌や伝染病などへの知識が深まり、衛生に気をつけるようになります。特に大勢の児童が集まる小学校では、日当たりや換気への気配りとともに、校舎や教室を清潔に保つようと、早くから国によって指導されていきました。1897年(明治30)の文部省訓令「学校清潔法」では、日常の掃除、定期的な掃除、そして浸水後の掃除、それぞれの方法を細かく規定しています。

ただ、この法令は学校当局にあてたもので、児童あてではありません。にもかかわらず実際には多くの学校で、子どもたちが教室の掃除を行なうようになりました。さらに修身科でも、掃除の大切さを教えるようになります。掃除が、学校教育の一環として位置づけられていったのです。

なお、世界105カ国を対象に

した学校掃除の調査によると、清掃員が行なっているのが61カ国、清掃員と児童が行なうのが8カ国、日本のように児童が中心となつて行なうのが36カ国とのこと。国によって掃除の捉え方にも違いがありそうです。

拭き掃除を通じて 水の二面性を学ぶ

乾拭きと水拭きは目的が異なり、どちらにも意味があります。それでも日本の拭き掃除の基本といえば、やはり水拭きでしょう。そこには、日本ならではの大きな二つの理由があります。

一つは多湿な風土です。乾燥している国と違い、湿度が高いとカビなどが発生しやすくなります。そのため衛生意識が高くなり、掃除も徹底して清潔にすることが求められます。また湿気のせいでも、部屋に舞い込んだほこりなどは床や壁に付着しやすく、ベタベタと不快でもあるため、乾拭きできつと払うだけでなく、水拭きできつかりと汚れを拭い去ることが好まれるのです。

もう一つの理由は、水に恵まれた環境です。日本は雨がよく降りますね。特に上水道が普及してからは、水をふんだんに使うことが



授業後に教室の机を雑巾で拭いている子どもたち
(1953年撮影／熊谷元一写真童画館蔵)

できますので、汚れたら水で洗い流すというのがあたりまえの感覚としてあります。そしてもう一つ、日本人は昔から自然を崇拜し、なかでも水を神聖視してきました。水拭きという行為には、水で穢れを落とし浄めるという意識が働いているのだと思います。

作家の幸田文は、『父・こんなこと』（新潮社1955）という本で、女学校時代に父の幸田露伴から掃除の心得を教わったエピソードを綴

っています。箒で掃く、はたきをかける、その一つひとつの所作を露伴から教わるのですが、特に厳しかったのが水の掃除の稽古でした。

「水は恐ろしいものだから、根性のぬるいやつに水は使えない」とまずおどされ、バケツに汲む水の量から雑巾のすぎ方、絞り方、拭き方まですべてダメ出しされます。文はそれに反発を覚えますが、自分が雑巾を絞った後、バケツの周りに大量の水滴が飛び散っているのを見て、水扱いの難しさに気づきます。大事な本や書類が濡れたら大変なことになりますから。このように露伴は、身近な拭き掃除を通じて、水がもつ恵みと恐ろしさという二面性を娘に教えたのです。

明日を生きる力は 日々の生活から

最初にお話しした母の影響もあるでしょう。私は普段からよく拭き掃除をします。ですから常にタオルでつくった雑巾をたくさん用意しています。といっても、タオルを半分に折って端を縫い、表に返してさらに両サイドを縫っただけの簡単なものです。タオルのままではひらひらして扱いにくい

ので、暇な時間に少しずつ縫い溜めておくのです。

バケツに水を入れて持ち運び、1枚の雑巾を洗いながら掃除する人が多いと思いますが、その方法では絞るときに水滴が飛んだり、水をこぼしたりする危険があります。ですから雑巾がけをする際は、たくさんさんの雑巾を固く絞ってバケツに入れておき、汚れたらきれいな雑巾に取り換えて、最後にまとめて洗う。それが私のやり方です。昔の人は、掃除はもちろん、生きていくうえで必要な身の回りのことはみんな自分たちの手でやっていました。日常の家事は、水や火の扱い方、自然とのつきあいなどを、体を使って学ぶ場でもあったのです。

最近では電化製品などが進化し、いろいろなことを機械がやってくれます。便利な時代になりましたが、本当にそれでいいのでしょうか。歩かなければ足腰が弱るようになり、生活を機械任せにしていたら人として生きる力が弱まり、社会全体が劣化していくのではないかと危惧しています。

雑巾を洗う水は冷たいし、中腰で雑巾がけするのは大変です。でも、拭いた後はすがすがしい気持ちになります。そんなあたりまえの充実感を、もう一度見つめ直す

時がきているのではないのでしょうか。

(2017年12月8日取材)

小泉和子さんの「雑巾で拭く」作法



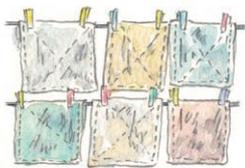
①雑巾を固く絞る



②空のバケツに雑巾をたくさん入れて持ち運ぶ



③四つ折りにして拭く



④終わったら洗って干す



生活史



地域

「雑巾がけ」の 速さを競う勇者たち

愛媛県西予市宇和町では、全国的にも珍しい「雑巾がけ」のレースが毎年開催されている。その名も「Z-1グランプリ」。Zとはもちろん「雑巾」の頭文字だ。主催は西予市商工会青年部。いったい、どのようなレースなのか。台風22号が接近するなか、宇和町を訪ねた。



「日本一長い」との呼び声高い宇和米博物館の木造廊下。109mあるため、スタート地点から眺めてもゴールが見通せない

「雑巾がけ」と呼ぶ 地元の人たち

「Z・1グランプリ」の開催前日、西予市宇和町に着いたのは夜7時過ぎだった。宇和町は本誌55号で紹介した肱川^{ひじかわ}が流れるまちであり、弥生時代から稲作文化が根づく県内屈指の米どころでもある。旅館に荷物を置き、夕食を食べるために外へ出ると、台風特有の生暖かい風が吹いていた。旅館の人に勧められた料理屋に

入る。個人宅を増築したようなこぢんまりとした店で、先客が5名いた。おかみさんにZ・1グランプリの取材で訪れたことを告げると、「ああ、『雑巾がけ』の取材かい？ 私も2回出たことあるけど、あれはつらいのよ」とこともなげに言う。

えっ、出たことがある？
配膳係としておかみさんをサポートする女性も「そうそう！半分くらいまで行くと、もう体が動かなくなるのよね。もう出たくないわ」と笑う。



「小学四年生以上の部」に出場した子どもたち。基本的には二人一組で雑巾がけ(乾拭き)してタイムを競う

翌朝は少し早めに会場の「宇和米博物館」へ向かった。台風による雨風が強まっていて中止になるのではないかと心配したが、準備が進められていたのでホッとする。Z・1グランプリの実行委員長を務める岡村康弘さんによると、西予市(当時は宇和町)商工会青年部が2004年から毎年開催している。宇和米博物館にある109mの木造廊下を雑巾がけ(乾拭き)で駆け抜け、そのタイムを競うもの。宇和米博物館は、かつて宇和町小学校の校舎だった建物を高台に移築し、米づくりの伝統と歴史を紹介

挑戦者を待ち構える 直線109mの木造廊下

どうやら、このまちの人たちにとってZ・1グランプリはかなり身近なものらしい。おかみさんが以前は「雑巾がけレース」と呼ばれていたことも教えてくれた。旅館に戻ってフロント係の男性に聞いてみると、「参加したことはないけれど、会場は見に行ったことがあるよ。あんなに長い廊下を雑巾がけしようなんて気はまったく起こらないけどね」と苦笑いする。Z・1グランプリは、かなり過酷なレースのようである。



宇和米博物館の外観。耐震工事は完了したので、これからはZ・1グランプリは続けられる

介する博物館だ。1928年(昭和3)に建てられたというので、90年ほどの歴史をもつ。Z・1グランプリのきっかけはかつてこの木造校舎で学んだ人が「この長い廊下で雑巾がけ体験をやったらおもしろいよ」と観光客から言われたこと。その人は商工会青年部OBだったことから、「やってみようか!」と盛り上がった。ちょうど「えひめ町並博2004」を控えていた時期でもあり、「自主企画イベント」として商工会青年部が軸となり、予選と決勝の日程を分けて開催した。「最初の年(2004年)は合計5回実施したと聞いています」と岡

(注)えひめ町並博2004

事業名は「愛媛県南予地域観光振興イベント」。大洲、内子、宇和を中心に宇和島市や八幡浜市など南予一円で2004年4月29日から同年10月31日までの186日間にわたって実施された。地域の資源や地元住民、団体の活動を基盤とした「まちづくり型観光博覧会」に位置づけられる。



2017年のZ-1グランプリ実行委員長を務めた岡村康弘さん。唯一の課題は「青年部の人手不足」という

村さん。それから年4回、年3回と続き、今は年に1回開催している。

木造廊下109mのうち100mをタイムトライアルする。残りの9mは、スタート地点とゴール地点の緩衝帯で、特にゴール地点はスペースを広めに設けている。かつてゴールした後に勢い余って壁に頭をぶつけた人がいるからだ。木造廊下のスタート地点に行ってみたが、ゴールははるかかなた。昨夜聞いた「半分くらいで動けなくなる」という話は決して大げさではない。

誰でも参加できる 6つのカテゴリー

風雨は強まる一方だったが、開会式が近づくにつれて続々と参加者が到着し、講堂はあつというまに人で埋め尽くされた。家族連れやスポーツ少年団の子どもたちのほか、若者のグループや年配の方

もいる。

その理由は、あらゆる年齢層が雑巾がけを楽しめるように、年齢と性別でカテゴリーを分けているからだ。小学三年生以下の部、小学四年生以上の部、ダブルス（ペアの一人が小学生以下）、女子の部、マスターズ男子（40歳以上）の部、一般男子（中学生・39歳）の部と6つのカテゴリーがある。

西予市三瓶町に住んでいる小学生の姉と弟、母、祖父母の五人家族に話を聞くと、Z・1グランプリは地元でかなり有名なイベントで、開催日は必ずテレビニュースで取り上げられるそうだ。

入念にストレッチを行っていた男性に声をかけると、隣の宇和島市からの参加者だった。

「おもしろそうだと思って初めて参加します。去年も出場するつもりでしたが、気づいたら締め切りが過ぎていて。どれくらいのタイムが出せるか、楽しみです」と笑う。腕立て伏せや腹筋運動を欠かさず、自宅の廊下で雑巾がけも練習してきたそうだ。

開会式では、前回の1・5倍の申し込み人数（約150人）となったことが明かされた。また、遠方からの参加も増えている。岡村さんによると、台風の影響で不参加になったが、大分県から申し込みが

あったそうだ。

今回、もつとも遠くから参加したのは、名古屋に住む倉田秀健さん、岡田銀河さん、堀田繁さんの三人組。倉田さんは社会人、岡田さんと堀田さんは大学院生で、ともに大学生だった3年前にZ・1グランプリを知り、「参加の機会を窺っていた」とのこと。目標タイムは、これまでの最速記録（17秒44）を上回る17秒フラット。大学でアメフト部員だった三人ならば、記録更新も期待できそうだ。

「こんなにきついのか!」 雪辱を誓う参加者たち

小学三年生以下の部が始まった。二人一組でスタートしてタイムを計測する。力を入れすぎてつんのめる子、途中でバテてよるける子もいる。40秒台が多いが、一位の子は31秒台を叩き出した。

二人で一枚の長い雑巾を押すダブルスは親子、特にお母さんと子どもがペアが多い。たいていお母さんが先にへばる。隣にいる子どもにも「がんばれ〜」と言われるながらゴールを目指す。ゴール地点で実況中継する地元のタレントさんたちも「お母さん、つらそう!今夜は外食決定でしょう!」と声を張り上げて笑いを誘う。ゴール

した人たちのホツとしたような笑顔が印象的だった。

ラストは一般男子の部。最速記録を狙う人たちが多く、緊張感がみなぎる。名古屋から参加した倉田さんと堀田さんが同組で競い、岡田さんもタイムトライアルしたが記録更新はならず。三人とも悔しさを隠せない。「きつかった」「もつと速いタイムが出せると思ってたのに」「次はちゃんと練習して体をつくってきます」と雪辱を誓った。

一般男子の部の優勝者は今治市在住の定由征司さん。タイムは18秒30。自己記録を0・02秒更新しての優勝だった。奥さんと娘さん二人の一家四人で参加し、ダブルスとダブルエントリー。宇和町まではクルマで2時間ほどかかる。「私は3回目の出場です。去年、子どもたちも参加して『楽しかった』というので今年も来ました」

定由さんは44歳だが、筋骨隆々とした体つきだ。聞けば世界マスターズ陸上競技選手権大会にも出場しているという。日ごろの鍛錬がいかにか大切かを思い知らされる。4時間にわたって熱戦が繰り広げられたZ・1グランプリ。閉会式で驚いたのは景品の豪華さ。そしてお楽しみ抽選会では参加者ほぼ全員がなにかしらお土産をもら

各部門の優勝タイム

小学三年生以下の部	31秒14
小学四年生以上の部	24秒00
ダブルス	26秒66
女子の部	23秒01
マスターズ男子の部	22秒12
一般男子の部	18秒30



名古屋から車に乗って参戦した倉田秀健さん(左)、岡田銀河さん(中)、堀田繁さん(右)。元アメフト部の猛者たちも、木造廊下の雑巾がけでは大苦戦。記録は20秒台半ばとなり、悔しそうだった



一般男子の部で優勝を飾った定由征司さん(右端)とご家族。奥さんと長女、定由さんと次女の組み合わせでダブルスにも出場した



講堂で開かれた表彰式。一般男子の部の優勝者、定由征司さんには宇和米一俵が贈られた



ゴール地点の様子。実況役のタレント二人がマイクを通じて声援を送り、出走者たちを励ましていた

っていた。岡村さんによると、すべての品はスポンサーが提供してくれたもの。

「昔から支えてくださるスポンサーには感謝しております。Z・1グランプリは、市内では広く知られていきますので、今後は県内外からより多くの人々に来ていただけるようにしたいです」と岡村さん。参加者が泊まることで、西予市には賑わいと経済効果が生まれるからだ。

日本人にとって雑巾がけは身近なものだが、実はつらい。「こんなはずじゃ……」と音を上げる人が後を絶たなかった。考えてみれば、雑巾がけは僧侶の修行の一環でもある。簡単そうに見える「拭く」という行為の奥深さを感じる。

そしてなによりも、かつて小学生時代にやらされていた雑巾がけを、タイムを競うスポーツとして一般化したことの功績は大きい。「つらいけれど楽しいもの」として次の世代に受け継がれていくはずだ。

宇和米博物館では、Z・1グランプリに限らず、開館中はいつでも木造廊下で雑巾がけが体験できるという。またここ数年、愛知県や奈良県でも雑巾がけレースが始まったようだ。物は試し。興味のある人はチャレンジしてはどうか。

(2017年10月28〜29日取材)



地域



「拭くシート」から見える日本事情



汗拭きシートで腕などを拭く。近年新たに生まれた生活習慣だ

近年、汗を拭いてさっぱりするシート、そして化粧を落とすために顔を拭くシートの普及が目立つ。こうしたシートはひと昔前にはなかったもの。その開発された経緯や背景を探ると、日本人特有のニーズや好みが見えてくるかもしれない。国内外にシートタイプの「拭く」製品を展開する花王株式会社に話を聞いた。

日本ならではの「汗拭きシート」

飲食店で出されたおしほりで、顔や首すじを豪快に拭いている男性の姿をよく見かける。行儀がよいとは言えないが、たしかに気持ちよさそうではある。高温多湿の日本だからこそ、べたつく肌を拭いてさっぱりしたいと感じる人は多いのだろう。汗をかいたとき、いつでも手軽に使える「汗拭きシート」は、そんな日本ならではのヒット商品といえる。

花王株式会社は、汗拭きシートやメイク落としなど、シートタイプの「拭く」スキンケア製品をいち早く開発、製品化してきたバイオニアだ。同社で商品開発を担当する高鍋英信さんは、次のように言う。

「シート製品の基本は、不織布の

シートに液剤を含浸させて包装するという、至ってシンプルな構造です。ただしスキンケアの場合は、ウェットシートのようにただ拭けばいい、というものではありません。目的に応じた成分の調整、液剤をしっかりと保持できる素材や構造の設計、さらに肌に触れた際の感触にも高い品質が求められます」

1999年（平成11）に発売された「ビオレさらさらパウダーシート」は、汗を拭きとり肌をさらさらにすることを目的とした、業界初のシート剤型デオドラント製品（汗拭きシート）だった。なぜ、このような製品が生まれたのだろうか。

拭きとりながらパウダーを残す

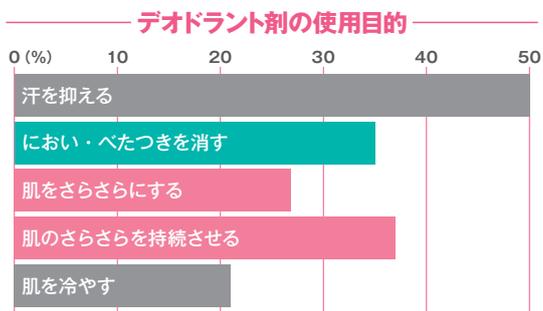
そもそもデオドラント製品は、大きく二つに分けられる。①汗腺



花王株式会社スキンケア事業グループで商品開発担当部長を務める高鍋英信さん

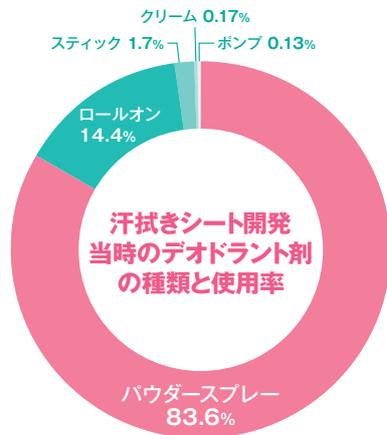


花王株式会社の「拭く」スキンケア製品（シートタイプ）。上段が「ビオレさらさらパウダーシート」（1999年発売）。下段が「ビオレメイク落とし ふくだけコットン」（1997年発売）。いずれもボックスタイプと携帯用



汗を抑える、消臭、肌触感に対する期待度と満足度の乖離が大きい

グラフはすべて花王株式会社調べ。開発当時の調査のため最新のデータではない



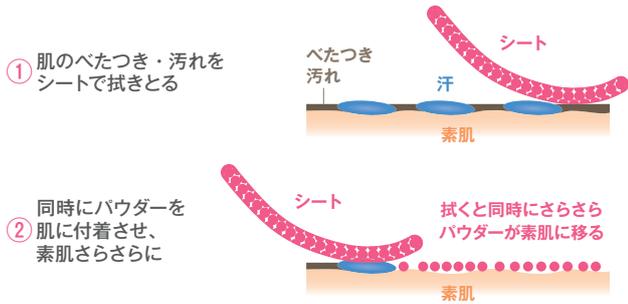
を塞いで汗自体を出にくくするタイプ、②出た汗の臭いや不快感に対処するタイプだ。「欧米やアジアでは、①汗が出る

のを抑えるスティックやワックスが圧倒的に主流です。しかし日本人はそれほど体臭がきつくないこともあり、国内では従来から②の『対処型』の方が一般的でした。特に清涼感や香りが楽しめるパウダースプレーが人気で、市場の8割以上を占めていました」と高鍋さん。

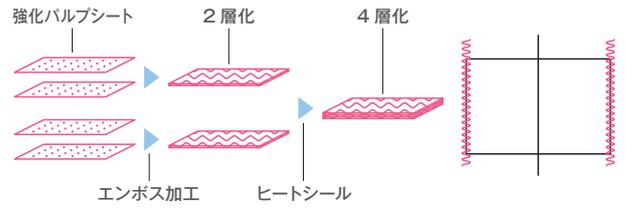
ただし、当時の使用実態を調べていくと、消費者側の目的と、実際の製品にズレがあることがわかった。「対処型のデオドラント製品を使う理由を聞くと、『汗のべたつきや臭いが不快。できればこまめに拭きとって、肌をさらさらに保ちたい』という声が多かったのです。しかし、パウダースプレーやロールオン（塗るタイプ）は、使ってすぐは清涼感がありますが、汗を拭きとるわけではないですし、さらさら感もそれほど長くは持続しません。その点での満足度が低かった。そこで、汗拭きシートの開発を始めたのです」

いちばんの課題は、「肌のべたつきを拭きとりながら、肌をさらさらにするパウダーを付着させる」という、相反する二つの機能を一枚のシートで両立させることだった。さまざまな素材のなから、パウダーが繊維に入り込まず表面

「ビオレさらさらパウダーシート」独自の技術

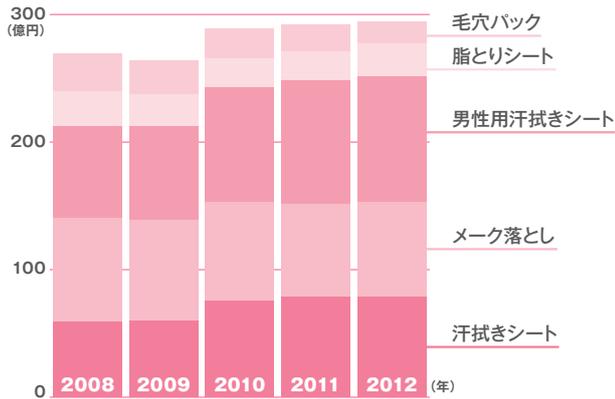


パルプ4層シートの理由



強化パルプシート：薄くても破れにくい。パウダーを転写しやすい
 エンボス加工：ボリュウム感と柔らかさ
 ヒートシールによる4層化：シートに厚み・ハリを与え、肌が拭きやすい

スキンケアシートの市場規模トレンド



「汗拭きシート」の使用状況

目的 (MA)	目的	制汗防臭剤 (既存の制汗剤)	シート化粧料 (汗拭きシート)
		体臭が出るのを防ぐ	47%
目的 (MA)	汗が出るのを防ぐ	45%	13%
	汗によるべたつきを取る	36%	85%
	肌をさらさらにする	27%	50%
部位 (MA)	出てしまった汗をひかせる	21%	44%
	わきの下	92%	63%
	首	31%	74%
	腕	15%	61%

既存の制汗剤とは異なった目的・部位で使用された

グラフはすべて花王株式会社調べ。開発当時の調査のため最新のデータではない

意識が異なるからだ。

「社会が成熟して豊かになると、身だしなみに気を配るようになります。特に日本人は清潔好きで、また他人に迷惑をかけたくないという意識が強いため、汗拭きシートでこまめに汗を拭いて肌を清潔に保つことが、一つのマナーとして捉えられたのでしよう」

なお、同製品は海外にも展開しているが、日本ほどの需要は今のところ見込めないという。前述のように「出た汗をなんとかしたい」と考える日本と「汗が出ることを抑えたい」と考える海外とで

汗を抑えたい海外
汗を拭きたい日本

に留まりやすいパルプシートを選定。さらに、液剤やパウダーの保持力を高めるためにシートを4層構造にし、エンボス加工を施すなどして、「汗を拭きとる」「パウダーを肌ののせる」という二つの条件をクリアした。

「例えば、こまめにハンカチで拭くよりも、シャワーを浴びる習慣が多いアジアの暖かい国では、汗をかいたら一日に何度もシャワーを浴びます。そして欧米は、そもそもデオドラントに対する意識が違って、あくまでも汗は止めるべきもの。それでも出てしまった汗は、やはりシャワーで洗い流すのが基本なのです」

しかし、アジアや中東の人々の意識が変われば、拭くシートが定着する可能性は十分あると高鍋さんは考えている。

女性の社会進出で
メーク落としに変化

一方、シートタイプのメーク落としが開発された背景には、メークのトレンドや女性のライフスタイルの変化が大きく関係していた。「ビオレメイク落とし ふくだけコットン」が発売されたのは、1997年(平成9)。当時は強めのアイメイクが流行で、落ちにくいウオータープルーフのメークアイテームが重宝されていた。落ちにくいということは、落としにくいということ。ポイントメーク専用の強力なメーク落としやダブル洗顔があたりまえだった。

また、女性たちの社会進出が進

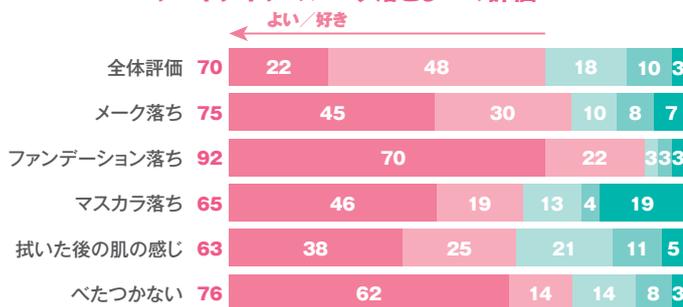


女性たちのメイク方法、そしてライフスタイルの変容がシートタイプのメイク落としを生んだ

んで、仕事に遊びに忙しい生活を送るようになっていた。「化粧を落とさないのは肌に悪いとわかっていても、疲れて帰宅した後、わざわざ洗面所や風呂場へ行ってメイクを落とすのはけっこう面倒です。できればリビングで簡単にメイクを落としたい……。女性たちのそんな声から、シートタイプのメイク落としが生まれたのです」

同商品はアジア各国でも販売しているが、国によって化粧事情はさまざまだ。日本をはじめ台湾や香港、シンガポールなどはファン

シートタイプのメイク落としへの評価



シートタイプを使用していないユーザーに高く評価された

花王調べ 16～49歳女性 (N=73) シートタイプ非使用者・WP マスカラ使用者

デーションでベースから整えるフルメイクが基本で、メイク落としは必須だ。ところが、インドネシアやベトナムなどは、アイシャドーや口紅などのポイントメイクだけで化粧を済ませる人が多いという。

「メイクのトレンドは、女性の社会進出や生活水準に応じて、ポイントメイクからフルメイクへと進化していく傾向があるので、東南アジアの化粧事情も今後、変わっていくでしょう。ただし、アメリカでは日焼けした素肌も美しいと考える人たちも少なくありません。

使い方に現れる拭くことへのこだわり

美しい素肌には地域や人、また個人の考え方によって違います。このように美の基準は一つではないので、完全な予測は難しいですね」

こうしたスキンケアシート製品は、2011年の震災以降、販売量が大きく伸びている。水場が近くにない、お湯が出ないことを想定すると、水なしで使えるシート製品の利便性が注目されているのだろう。

また、最近の傾向として、10代、20代の若い男性の利用が目立つ。「母親や彼女など、周囲の女性の影響でスキンケアを始める男性が多いようです。昔の男性に比べてかなり衛生意識が高く、製品のことともよく知っていますね」

ところで、シート製品が「意外とエコ」であることはあまり知られていない。「シートは使い捨てなので環境によくはないと思われがちですが、CO₂排出量という観点で見れば、もつとも効率が悪いのは長時間流しっぱなしで使うお湯です」と高鍋さん。シャワーを浴びる代わりに汗拭きシートで体を拭き、できるだけお湯を使わないで、体を清

潔に保つことで、CO₂排出量をかなり抑えることも可能という。そう聞くと、シート製品の印象が少し変わってこないだろうか。「都心は年々暑くなっています。最近のビルは内部に熱がこもらないよう太陽光線を反射する素材を取り入れていますし、自動車のUVカットガラスは日光を乱反射させるので、真夏の路上は砂漠より暑いほど。少し歩いただけで汗をかきます。簡単にシャワーを浴びられる環境はそうありませんから、『拭く』機会はこちらからますます増えるのではないのでしょうか」

さまざまな国でスキンケアシート製品を扱ってきた花王のスキンケアチームは、ある興味深い事実に気づいた。「汗拭きシートでもメイク落としでも、海外の人はシートを広げたままざっと拭きます。ところが日本人は必ずと言っていいほどシートを折り畳んで、きれいな面を出しながら、裏表まんべんなく使うのです。ですから両面をしっかりと使えて、指の力も伝えやすい製品にする必要があります」

花王のスキンケアチームが発見した、そんな細かな動作からも、日本人の「拭く」ことへのこだわりが見えてくる。

(2017年12月18日取材)



生活用品



五感

「今、ハル」へ戻るために

触覚体験としての「拭く」

インタビュー

鈴木禎宏さん

お茶の水女子大学基幹研究院
人文科学系 准教授



Sadahiro Suzuki

1970年千葉県生まれ。1994年東京大学教養学科卒業。1999年同大学院比較文学比較文化博士課程退学。2001年お茶の水女子大学生活科学部講師に就任。2002年にバーナード・リーチの研究で博士号を取得。2007年から准教授。専門分野は比較日本文化論、生活造形論。『バーナード・リーチの生涯と芸術』（ミネルヴァ書房 2006）でサントリー学芸賞、日本比較文学会賞、ジャポニスム学会賞を受賞。現在、文化資源学会会長。

スマートフォンを始めとするモバイルデバイスの普及によって、いつでもどこでも視覚・聴覚で情報が得られるようになった。今後、AIの導入が本格化すれば、人間はますます「情報」と呼ばれる電気信号を重んじるようになるだろう。そのなかで「拭く」という行為はどのような意味をもち得るのか。比較文化史の研究者である鈴木禎宏さんに、「拭く」と「触覚」について語っていただいた。

キッチンで起こる 国際結婚のトラブル

日本では、水の豊かさが「拭く」という行為に大きく関係しているようです。水が豊富に存在するので、水を惜しまず流しっ放しにして洗い、きれいに拭きとる。もちろん、水を使わないで洗う人はいませんが、水がどれくらい貴重かで、洗い方も拭き方も変わってくるかもしれません。

私の知人に、日本人の女性とイギリス人の男性のカップルが何組かいます。皆さんが言うのは「最初のトラブルはキッチンで起こ

る」と。つまり、日本人の女性は洗剤で洗った食器をどんどん水道の水で流す。すると、それをそばで見っていたイギリス人の男性や彼の母親が「もったいない」と苦言を呈する。そんな場面があるらしいのです。

ドイツのご家庭にお邪魔したとき、私自身も同じような経験をしました。キッチンで食器洗いを手伝ったのですが、泡だらけの食器をいきなり大きな布巾で拭くのです。洗剤を水道の水で流さない。

古いヨーロッパ映画を観ていると、お風呂についても同じことがいえそうです。浴槽にせっけんを泡立てて体を洗い、そのままバス

ローブを羽織る。さすがに今はシヤワーがあるので、ちゃんと流してから拭くのでしょうか……。

いずれにせよ、よくよく見ると「拭く」行為も文化によって違うようです。水が豊かな地域では、どんどん水を流して汚れを拭い去る。そうでない地域だと、なるべく水で流さずに拭きとる。そんなふうに言えそうです。「拭く」行為は気候・住居・設備との関係で考えねばなりません。

ちなみに、先の日本人女性とイギリス人男性のカップルがどう事態を收拾するかといえば、「熱湯をチヨロチヨロ流しながら洗剤の泡をすすぐ」というところで妥協に

至るようです。

「今、ここ」から 意識が拡散する現代

仏教の禪宗では掃除に代表される日常の作務が精神的な修行につながるという説が広まりました。掃除をするときは自分が雑巾になりきって「拭く」という作業に集中する。そうすることによって、ともにすれば過去や未来の別の時間、あるいはどこか他の空間にあれこれと思いを馳せ、さまざまに雑念を振り払い、ひたすら「今という時間、ここという場所」に集中する。掃除、洗濯、炊事など日常

の作務が、仏教でいう座禪の修行と同等の価値がある精神的な修養として昔から重視されてきたことは周知の事実です。

しかし、現代の生活を省みてどうでしょう。技術がどんどん進歩した結果、ますます人間の意識が「今ではないいつか、ここではないどこか」に飛びやすくなっています。何かをしているとき、その行為に集中せず、ついついほかのことを考えている。会議や授業に出席しながらスマートフォンをいじって意識をどこか別の場所に飛ばしている人は少なくありません。

意識を拡散させる方向の言葉です。一カ所にじっとしていても、いつでもどこかつながっている気がしなければ落ち着かない社会になっています。

没入するための「模様化」

だからこそ、なおいつそう「今」という時間、ここという場所に帰ってくるのできる行為を大切にすべきではないかと思うのです。炊事、洗濯、料理などの家事。

洗顔、化粧、歯磨きなど、意識せずとも自然に体が動く生活習慣。このように毎日繰り返す行為がよいのかもしれませんが。それは一種の「型」であり、その動作によつ

て心が落ち着くこともあります。

宗教哲学者で民藝運動を主導した柳宗悦は、茶道の点前の説明に「模様化」という言葉を使いました。よけいな動きが削ぎ落とされて、やるべきことを最低限の動きで、しかも格好よく行なう。繰り返して修練を積むうちに同じ軌道を描き、同じタイミングで体が動くようになる。動作が「型」になっていくさまを「模様化」と表現したわけですね。

16世紀に成立した侘び茶もまた、茶室に在る間は余計なことを一切考えず、目の前のお茶にひたすら「没入する」営為です。「今」という時間、ここという場所に帰ってくるための修練ともいえる茶道が現代に続いている日本は幸運な国なのかもしれません。

触覚体験としての拭き掃除の価値

「今」という時間、ここという場所」に帰ってくるきっかけとして、「拭く」行為に代表されるような「手の触覚」をもっと重視した方がよいと思います。下手をするとき一日中スマートフォン画面だけに触れている現代人の触覚体験は貧しくなっています。

なぜそれがまずいかというと、



帛紗(ふくさ)を用いて「茶杓(ちゃしゃく)」を拭く作法を実演する鈴木さん

人体は性能がよすぎて、視聴覚の情報だけだと、頭はともかく体が満足してくれないからです。

ある研究によると、脳のなかで処理されている感覚の情報量は毎秒数百万ビット。そのうち意識できる情報量は多く見積もっても毎秒40ビット、実際はせいぜい16ビットだそうです。つまりスマートフォンなどの情報機器から得られる視聴覚の情報量は、無意識下で処理できる情報量に比べると少なすぎるのです。「見る、聞く」だけに頼りすぎるのは、人間にとって健全な状態とは言えません。

見失いがちな「今」という時間、ここという場所へ帰るきっかけとして、さしあたり拭き掃除に精を出し、触覚の豊かさを取り戻すのがもっとも手取り早く、かつ有効ではないでしょうか。

(2017年12月13日取材)



五感



家庭紙

誰も知ろうと しなかつた「拭く紙」

身の回りを拭くものといえば、ティッシュペーパーなどの「紙」も身近な存在だ。水回りでいえば、トイレトペーパーは現代の必需品と言っている。そこで、家庭で使われる紙の歴史、特にトイレトペーパーを中心に「家庭紙史」を研究する関野勉さんに、国内外のお尻を拭く紙や道具についてお聞きした。

インタビュー
関野 勉さん
家庭紙史研究家

Tsutomu Sekino

1934年青森県生まれ。文具の卸売業、万年筆のインクメーカー、防虫剤・殺虫剤の販売会社を経て、1970年に製紙会社へ転職。その後、機械すぎ和紙連合会で勤務。世界65カ国を回り、トイレやトイレトペーパーに関する史料・資料や各国のトイレグッズを集めるなど、家庭の紙の歴史を研究している。



12〜13世紀から 紙で拭くように

——家庭における紙の歴史を研究したきっかけをお聞かせください。

文房具関連の仕事をした後、1970年（昭和45）からトイレトロール（注1）とティッシュペーパーを製造する製紙会社に勤めたのですが、3年後の1973年（昭和48）に第一次オイルショック（注2）が起きました。あのときは日本中が混乱しましたね。もちろん、紙の在庫はすっからかんでした。

ところが、オイルショックが終わって落ち着くと、「どうしてトイレトロールはこの幅なんですか？」「なぜミシン目が入っているんですか？」といったいろいろな

問い合わせがありました。ところが、答えられなかったのです。あって当然と思っているのに誰も知らないし、歴史について書いたものもありません。

そこで自分で調べはじめたのです。海外にも足を運び、ざっと65カ国は訪ねています。

——日本ではいつから紙が使われていたのですか？

手漉きの紙は、紀元前に中国で発明されました。前漢時代（前202〜後8）とされています。日本に伝わったのは、『日本書紀』によると7世紀です。610年（推古18）に高句麗から渡来した僧・曇徴（ちんぎょう）が伝えたとありますが、実際には4〜5世紀には伝わっていたと考えられています。

紙には、書写、包む、拭くなどの用途がありますが、トイレトペーパーとして紙が使われた可能性を示す記録が6〜7世紀の中国の家訓書『顔氏家訓』にあります。訳し方によって異なるようですが、私は「文字の書いてある紙は、鼻をかんだり、^{かわ}厠で使わないこと」と解釈しています。ですから、この頃すでに紙がお尻を拭くことに使われていた可能性があるのです。

——日本では、紙を使う以前はどうしていたのでしょうか。
紙を使う前は、^{ちゅうぎ}籌木を使っていた

（注2）オイルショック

1973年の第四次中東戦争をきっかけに、アラブ産油国が原油減産&大幅値上げを行なったため、石油輸入国に失業・インフレ・貿易収支の悪化という打撃を与えた事件（第一次オイルショック）。また、1979年のイラン革命に伴って産油量が減り、原油価格が急騰した（第二次オイルショック）。

（注1）トイレトロール

使用後の清拭に用いられる専用紙で、ロール状の巻紙のこと。今はトイレトロールをトイレトペーパーと呼ぶことが一般的。本稿では場合によって「ちり紙」と「トイレトロール」を使い分けた。



平安時代末期から鎌倉時代初期の作とされる「餓鬼草紙」。
排便している周辺に「紙」が散乱している(国立国会図書館蔵)

世界の「お尻を拭く道具」

①指と水	インド、インドネシアほか
②指と砂	サウジアラビアほか
③小石	エジプト
④土版	パキスタン
⑤葉っぱ	ソビエト(当時)、日本ほか
⑥茎	日本、韓国ほか
⑦とうもろこしの毛・芯	アメリカ
⑧ロープ	中国、アフリカ
⑨木片・竹ベラ	中国
⑩樹皮	ネパールほか
⑪海綿	地中海諸島
⑫布切れ	ブータンほか
⑬海藻	日本
⑭雪	スウェーデン
⑮紙	各国

西岡秀雄著『トイレトペーパーの文化誌』
(論創社 1987)より



飛鳥、奈良、平安時代までお尻を拭く道具として使われていた「籌木」(提供:関野 勉さん)

ました。用便の後にお尻を拭う木片のことです。「かき木」とも呼びます。飛鳥、奈良、平安時代まで使っていたようですが、高貴な人と庶民では籌木のつくり方も違っていたようです。高貴な人が使う籌木は角を削って滑らかな形に加工して使いました。中国は木ではなく竹だったそうです。

——使い捨てですか？

洗って再利用することもあったようです。籌木はお尻を拭くだけでなく本として使ったり、荷札として使ったりもしていました。ですから鉋で削って二回使ったもの

もありますし、一回で捨てたものもある。籌木といっても木を割るわけなので、いろいろな形があります。

——日本で実際にお尻を紙で拭くようになったのはいつですか？

12世紀後半の絵巻に『餓鬼草紙』があります。これは六道のうち餓鬼道に堕ちた者を描いたものですが、高下駄を履いて排便しています。そして人間と餓鬼がいて、その周辺に紙が散らばっているのです。『餓鬼草紙』には詞書がないので想像するしかありませんが、平安時代が終わって鎌倉時代あた

りからはお尻を拭く道具として紙が使われるようになったようです。つまり中国では6世紀頃に、日本では12〜13世紀頃に、お尻を紙で拭く習慣が生まれていたと考えるとよいでしょう。

ただし、庶民が使えるようになるのはずっと後の江戸時代からです。ちり紙の「浅草紙」が有名ですね。古紙を溶かして漉きなおした、あまり質のよくない再生紙ですが、庶民の日用紙として多く用いられました。

紙ばかりではない 外国の拭く道具

——各国を巡ったとのことですが、お尻を拭くのは紙が主流ですか？

いえいえ。これが実にさまざまなので拭いています。「お尻を拭く道具」は世界中で15種類ほど確認されています。

私もお世話になった慶應義塾大学名誉教授の西岡秀雄さん(注3)が著した『トイレトペーパーの文化誌』(論創社 1987)には、「指と水」「指と砂」「小石」「土版」「葉っぱ」「茎」「とうもろこしの毛・芯」「ロープ」「木片・竹ベラ」「樹皮」「海綿」「布切れ」「海藻」「雪」「紙」が挙げられています。

古代ギリシャ・ローマ時代の地

中海諸島では海綿を使っていたそうです。私もキプロス、ギリシャ、トルコ、イタリア、フランスは海綿だったことを確認しました。

ところが、エジプトは海綿ではなく、砂漠に落ちていた「小石」を使っていました。ピラミッド観光の男性ガイドたちは、ポケットに小石を数個必ず入れていました。なぜかわかりますか？ 砂漠に落ちていた小石は熱いので、拾ってすぐに使えません。だからポケットで冷やしておく。使い終えたら捨てますが、灼熱の砂漠なので自然に消毒できる——というしくみなのです。

——合理的ですね！

水がないので洗えませんからね。小石なら砂でこすられ、熱で殺菌されます。エジプトのトイレで紙を使っていると「君は日本人だね」と言われました。世界中の人が紙を使っているわけではないのです。

西岡さんの『トイレトペーパーの文化誌』が出版されたとき、世界人口は約55億人。西岡さんは「世界人口の1/3しか紙は使っていない」と書いています。ただし、今の生産量(約3400万トン)に鑑みると、世界人口の1/2、つまり35億人くらいは紙を使っているはずですよ。

(注3) 西岡秀雄さん

1913-2011。慶應義塾大学名誉教授、大田区立郷土博物館館長、日本トイレ協会名誉会長。専門は考古学・人文地理学。



(上)1904年の消印があるフランスの絵葉書。トイレのマナーを描くなかにはトイレットロールも見られる(下)アメリカでは政治家、特に大統領に関しては肖像権・プライバシー権の主張が大幅に制限されていて、こうしたトイレットペーパーも販売される(提供: 関野 勉さん)

トイレットロールは アメリカ生まれ

— 今、日本でお尻を拭く道具といえどトイレットロールですが、かつて主流だったちり紙から切り替わったのはいつですか？

第一次オイルショックのときは、まだちり紙の方が多く使われていました。当時は紙を巻いてミシン目を入れる機械がまだ少なかつたからです。ちり紙なら重ね切りすれば済みますからね。トイレットロールの生産量がちり紙を逆転したのは1977年(昭和52)です。トイレットロールに切り替わった理由の一つに「トイレの水洗化」

があります。

— そもそもトイレットロールは、いつ、どこで発明されたのですか。

それが長い間なぞでした。イギリスのオックスフォード大学出版局が刊行する『オックスフォード英語辞典』にトイレットペーパーの記述があるのですが、「トイレットロールは誰が開発したのかかわらない」と書いてありました。私が調べたのは5、6年前ですから改訂したかもしれません。

ずっと調べていて、ようやくアメリカのセス・ウェラーという人が、自分で特許を取得して自らトイレットロールをつくっていたことを突き止めました。アメリカに手漉きの紙が渡った

のは1690年で、1817年に機械式の製紙に切り替わります。セス・ウェラーは1838年に生まれました。1871年、セス・ウェラーは「Improvement in wrapping-papers」という名で特許「Patent US 117355」を取得します。「紙にミシン目を施してロール状にして用意する」というもので、これがトイレットロールの基本特許となりました。

セス・ウェラーは、1877年もしくは1878年にA・P・W (Albany Perforated Wrapping Paper Co.) という会社を設立し、トイレットロールを製造します。A・P・W社のトイレットロールがヨーロッパに輸出されていたことはわかっています。

私の手元に、1904年の消印が押されたフランスの絵葉書があります。トイレマナーの絵のなかにはトイレットロールがしっかりと描かれていますので、セス・ウェラーの発明が海を越えたのではなにかと想像しています。

白が好まれるのは 天然にない色だから

— 日本で最初にトイレットロールが製造されたのは？
現存する史料によると、192

4年(大正13)です。東京都紙商組合の「和紙随想録」には、土佐紙株式会社芸防工場(現・日本製紙グループ本社)が外国航路の汽船に積み込むため、トイレットロールをつくる機械を設置したと記されています。

— 日本のトイレットロールも100年近い歴史があるのですか。消費量は他国に比べてどうですか。

標準ですね。日本人の一人当たりの年間消費量は約8kg。幅と長さによって変わりますが、トイレットロール1個を150gと考えると、年間で53個。アメリカ人は9kg使っています。これはかなり古いデータですが、フランス人は3kgだそうです。かつて主食はパンと肉でしたから、ウサギの糞のようにうんちがコロコロしてお尻が汚れにくい。だから使用量も少なかったといわれています。ところがドイツ人は結構使っていて、トイレットロールの製造も盛んです。

— 国によってトイレットペーパーの色に違いはあるのでしょうか。

アメリカでは1930年代に色つきのものが登場します。また、海外では古紙をそのまま使用した黒っぽいものを多く見ます。日本の昔の手漉き和紙は原料となった楮こうぞの色ですし、浅草紙はね



(上)江戸時代に葛飾北斎が描いた浮世絵『富嶽三十六景 駿州江尻(すんしゅうえじり)』。風に舞い上がる「ちり紙」が描かれている(山口県立萩美術館・浦上記念館蔵)
 (右)歌川貞秀筆『風流職人尽 紙漉』。江戸時代後期に描かれたとされる(富士山かくや姫ミュージアム蔵)



トルコ・エフェソス遺跡の公衆トイレに腰掛ける関野さん。イスラム教徒は男性もトイレで座るという(提供:関野 勉さん)



楳の手漉き和紙。戦前のものと思われる。関野さんの父親が保管していた(提供:関野 勉さん)



日本の高級ちり紙のラベルや包装紙。昭和30年代頃のもの(提供:関野 勉さん)

ずみ色でしたが、徐々に白色が好まれるようになりました。

紫色が高貴な色とされているのは天然には存在しない色だからです。白色も同じで、真っ白くできなかったからこそ望まれた。薬品のなかった時代、白くするには水や雪にさらすしか方法はありませんでした。薬品で白くできるようになったのは昭和50年代からです。今は柄物やピンク色を好む人もい

ますが、母親が赤ちゃんの便の状態を気にしているように便は健康のバロメーターですから、見えやすい白色の方がよいでしょうね。

水がなければ紙はつけれない

海外を訪ねて、どんなところで日本との違いを感じますか？
 トイレットロールをつくれな

国があることです。イランやイラクの北方には水があるので紙はつくれる。けれど砂漠の国、例えばサウジアラビアやアフリカの国々では無理です。だからサウジアラビアは砂と水でお尻を洗うのです。紙は水がないとつくれません。そして、海外にはトイレットペーパーを買えない人たちもいます。特にインドではとても高価なので、ホテルのトイレットロールが日本

の1/3くらいの大きさしかない。一人か二人が一晩泊まるのに必要な分しか置いていません。そう考えると、日本は恵まれていますね。――「拭く」行為と紙については、どうお考えですか？

印刷の「刷」は漢字です。「する、こする」のほかに「はく、ぬぐう、きよめる」という意味もあります。刷新とは「拭いて新しくする」ということですが、中国には「拭」という文字はありません。実は、「拭」は国字なのです。

「露の葉」の語源は「拭く」だと私は考えています。金田一春彦さんが『ことばの博物誌』(文藝春秋1966)で、対馬の豪家のトイレを借りたときに新しい露の葉がうず高く置いてあったのを見て「紙を知らなかった昔の人は、用便のあと始末はフキの葉を用いたもので、それでフキの葉というのではなからうか？」と書いています。「露」拭き」と考えたのですね。

日本はヨーロッパよりも古くから紙を知っていますし、使っています。しかし、「拭く紙」が脚光を浴びることはありませんでした。「拭く」という作業で使われ、捨てられる地味な存在の紙に光を当てるために、私はこれからも研究を続けます。

(2017年10月25日取材)



家庭紙

どっこを拭くか「観察」して考える

過去に4回も「世界一清潔な空港」と評価された羽田空港には「カリスマ清掃員」と呼ばれる人がいる。日本空港テクノ株式会社勤める新津春子さんだ。多忙な日々を過ごすなか、「日々の家の掃除は、薄手のタオルで拭くだけ」という新津さんに、清掃・掃除に対する思い、そしてプロならではの「拭く」コツを教えていただいた。

新津春子さん

日本空港テクノ株式会社
環境管理部 環境マイスター

Haruko Niitsu

1970年、中国・瀋陽生まれ。17歳で来日し、家計を助けるために高校へ通いながら清掃の仕事に従事。日本空港テクノ株式会社入社後の1997年、全国ビルクリーニング技能競技会で最年少優勝(当時)。羽田空港が2013年、2014年、2016年、2017年に「世界一清潔な空港」に選出された際の功労者の一人として活躍。「清掃はやさしさ」「掃除は「ついで」にやりなさい」など著書多数。

羽田空港第一旅客ターミナルの出発ロビーでモップを手にする新津春子さん

「世界一清潔な空港」にプロとして貢献

東京都大田区にある東京国際空港、通称「羽田空港」は、国内48空港、世界18カ国・地域の30都市33空港（2016年冬ダイヤ）と結ばれ、年間8000万人（注1）が利用する日本の玄関口である。1時間当たりの発着回数は80回に上る。およそ45秒ごとに離発着が行なわれている計算になる。

平日の昼下がりに羽田空港の第一旅客ターミナルを歩く。人々が行き交っているが、利用者が多いと感じるのは、出発ロビーのある2階だ。荷物を預ける人、保安検査場に向かう人、ソファやイスに座って出発を待つ人、手土産を買う人——各々異なる目的をもって動き、旅立っていく。

フロアを見回すがゴミは一つも落ちていない。トイレもピカピカに磨き上げられている。それらもろは、羽田空港は「清潔な空港」として知られている。イギリスのSKYTRAX社（注2）の国際空港評価「The World's Cleanest Airports」部門で、2013年、2014年、2016年、2017年と4回にわたり世界第1位に選ばれた。

この調査は「お忍び」で行なわれるため、勤務する人たちの日々の努力が欠かせない。

「世界一清潔な空港」に選出された功労者の一人と称されるのが新津春子さんだ。清掃、設備管理、工事、植栽、花店などの空港内サービスを提供する日本空港テクノ株式会社で働く新津さんは、総勢700人も清掃員のスキルの底上げやモチベーションアップに日々取り組んでいる。

「やさしさがいい」心に響いた上司の指摘

新津さんは中国・瀋陽しんやうに生まれた。中国残留日本人孤児の父親が「日本に住もう」と決断し、1987年（昭和62）に一家五人で移住。家計を助けるために、「日本語がほとんど話せなくてもできるから」（新津さん）という理由で清掃の仕事に携わる。

その後、職業能力開発センターで清掃に関する知識や技術を体系的に学び、1995年（平成7）の春、日本空港テクノに就職する。「生活のために始めた仕事だけれど、技能を身につけて『清掃のプロ』として生きていこう」と心に決めた新津さんは腕を磨き、1997年（平成9）10月、全国ビルク

リーニング技能競技会で優勝する。しかし、全国大会に先立ち2カ月前に行なわれた東京予選では二位だった。いったい何があったのか。「予選で私の演技を見ていた上司に『あなたの演技にはやさしさがいい』と指摘されたのです」

最初は何を言っているのかわからなくて反発すらした新津さん。気づいたのは、「清掃の道具にも命がある」と言われてからだ。 「ハツとしたのです。私は清掃の型ややり方、所要時間にこだわるあまり、道具を雑に扱っていたのです。きつと表情もこわばっていたでしょう。審査員はお客さまと同じ目線ですから、私の演技を見てよい気分にならなかったはずです」

予選から本大会までの2カ月、新津さんは上司を観察して、道具の扱い方から立ち居振る舞い、笑顔までまねして猛練習した。そして当時の最年少記録となる27歳で優勝を果たす。

「けれど、一位になれたのはまねをして練習したからです。ほんとうの『やさしさ』、モノを大事にする『心』が自分のものになったのは、それからずっと先のことです」上司を見習って優勝してから、新津さんには人やモノをじっくり観察する癖がついた。「ちょこちょこ小さな歩幅でし

か歩けない方がいますね。私たちにはなんてことない段差でも、そういう方はつまずいて転ぶ危険があります。仕事中に気づいてそのままにしておいて、仮にお年寄りが転んでケガをしたら絶対に後悔すると思うんです」

じつと見て自分にできることを考える。たとえ自らの仕事の範疇じゃなくても改善のために声をあげる。これは新津さん流の「やさしさ」であり、そこには「心」がある。

日々の拭き掃除を最小限にするコツ

新津さんは清掃と掃除を使い分けている。仕事は「清掃」、そして家事として行なうのは「掃除」だ。清掃のプロである新津さんは、自宅でも隅々まで掃除すると思われがちだが、実はそうではない。



フェイスタオルを用いた壁の拭き方を実演する新津さん

（注1）年間8000万人

国土交通省東京航空局が2017年3月9日に発表した「管内空港の利用概況集計表（2016年確定値）」による。

（注2）SKYTRAX 社

1989年に設立したイギリス拠点の航空サービスリサーチ会社。世界の空港や航空会社の評価を行なう。



自宅の拭き掃除などについて語る新津さん

「家ではよく触るところ、そして動線を、水で湿らせた薄手のタオルでサツと拭くだけ。くまなく掃除するのは大掃除のときだけですよ」

家のなかにはドアノブなど必ず触るところがある。そこは欠かさず拭く。そして自分や家族が頻繁に歩く廊下や階段も拭く。そうした場所は「じつと観察して」見つけるのだ。

「どういう風に動くのか、どこによく座るのかを把握すれば、毎日の拭き掃除は最小限で済みますからね」

一時期、テーブルの下にごはん粒が落ちていたことがあったそう

だ。「食事の夫をじつと見ていると、体はテーブルから離れたまま首だけ伸ばして食べていたのです。『あなた、もっとテーブルに体を寄せ

て食べて!』とお願いました」と新津さんは言うが、「それに首も疲れるでしょ?」と付け加えたのは夫に対するやさしさだろう。

モノを大事にする「心」は今も健在。拭き終えたテーブルなどに「よかつたね、きれいになったね!」とよく話しかける。「心を込めればテーブルだつて長く使えますよね? 人にもモノにも気持ちが大それたんです」と新津さんは笑った。

八つ折りタオルは 万能の拭く道具

そんな新津さんの日々の掃除は、フェイスタオルを6〜8枚使うだけ。朝起きたらタオルを水でゆすいで絞って拭く。途中で洗わずに、すべてを終えてから洗って干すのだ。洗剤は使わない。タオルがしっとり濡れた状態で拭く「湿り拭き」^(注3)ならば汚れがとれるからだ。乾拭きも必要ない。

フェイスタオルを八つ折りで使う方法は、拭く道具として利点が多いと新津さんは言う。

「まずタオルを横に広げて2回折って、さらに縦に1回折ります。その大きさを、ちょうど人間の手のサイズなんです。指先ではなく手のひらで拭くので力も入りやすいから楽に拭き掃除ができる。

しかも八つ折りのため両面使えば合計16面拭けます。雑巾と比べて洗う・絞る回数が減りますし、タオルならば洗って干すのも簡単で、しかも乾きやすい。メリットばかりでしょ?」

壁を拭くときはタオルを伸ばして右手で拭く。左手はタオルの下を持ち、肩幅に足を開いて体ごと左右に動かすと疲れにくい(P29写真)。また、目で確認しづらい高いところは、伸ばしたタオルで手を包んで拭けば、ビスや突起で手を傷つける危険性はぐっと低くなる。

たった1枚のフェイスタオルに、これほど多様な使い方があり、思いもよらなかった。

拭くのはみんなが 健康でいるため

新津さんにとって「拭く」とはどういう意味をもつのか。

「例えば、私がキッチンをしつかり拭かなかつたために家族が食中毒になつたら、『私のせいだ』と後悔するでしょう。ほこりを拭いたり、

吸い取ったりしなければ、家族がぜんそくなどのアレルギー性疾患になるかもしれません。不衛生にしている健康への悪い影響が絶対にあります。だから、こまめに拭くのです」

みんなが常に健康でいるために拭く——。見落としがちだが、これがいちばん重要なことかもしれない。しかし、掃除が嫌い、苦手という人もいるはずだ。どうすればよいのだろうか。

「生きていくために、自分の髪の毛や体は洗いますよね。掃除もそれと一緒に。生きるために必要なんです。掃除用具をそろえなくてもタオル一本あればいいし、洗う・絞るが面倒なら使い捨てのウエットタオルを使えばいい。一緒に暮らしている人のために、汚れやすいところだけは拭く。『明日やろう』と先延ばしにすると精神的な重荷になってしまつて、結局やらない。サツと拭くことは、自分のためでもあるのですね」

新津さんには、プロならではの知恵と技術がある。フェイスタオルの使い方は明日からでも実践したいもの。そして、印象的だったのは「まずはじつと観察して、どこが汚れているか、どう拭けばいいかを考えること」という新津さんの姿勢だ。見て考えて行動するやさしさが人を幸せにし、モノを大事にする心につながり、ひいては自分の身を助けることにもなる。技に心が伴つてこそプロなのだ、改めて学んだ気がする。

(2018年2月1日取材)

(注3) 湿り拭き

濡れたタオルを乾いたタオルで巻いて軽く絞ると、濡れたタオルの水分が乾いたタオルに移ってちょうどいい湿り具合になる。

新津さん流の「拭く」工夫

1

オススメは「八つ折りタオル」

フェイスタオルを横に2回、縦に1回折る「八つ折りタオル」なら、表裏合わせて16面で拭くことができる



2

八つ折りタオルの絞り方



バケツを置くところに布を敷けば、水滴が垂れても大丈夫。片ひざをつくると体が安定するので、絞るときに力が入れやすい



手首でひねるのではなく腕全体で絞る
八つ折りタオルを半分に折る
バケツのなかで水に浸す



続いて手の甲の水も拭う。こうすれば水滴が周囲に飛び散らない
絞り終えたら開き、まず手のひらの水分を拭う

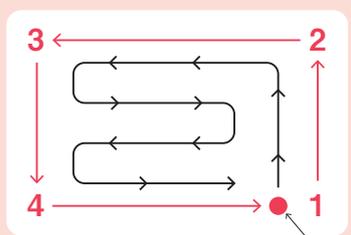
肩の力を意識するときつく絞れる。絞ったらいったん緩めてまた絞る。数回繰り返す

3

テーブル(机)の拭き方

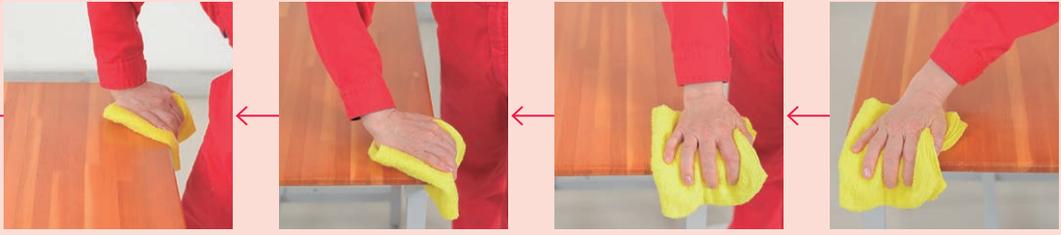


2 右上に到達。手の形は変えずそのまま横に移動
1 まずテーブルの枠に沿って上に拭いていく。側面も同時に拭けるように指を添える
八つ折りタオルは、タオルの端の重なりを親指と人差し指で挟むように持つとずれない



まずテーブルの四方を番号順にぐるりと拭き、タオルを裏返して奥から手前に拭く
タオルを裏返す

次は面を拭く。体に遠いところから左右交互に、横一線に拭いていく。そのとき、雑巾の幅の1/2が重なるように動かすと拭き残しがない



四方を拭き終えたときの手と腕の角度に注目。こうすれば一気に拭くことができる
4 左下に到達してもテーブルと手の向き関係は変えずこのまま横に移動
3 左上に到達。ここで右ひじを張るようにして左下に向かう

Point!

八つ折りタオルのきれいな面を出すときは、横ではなく「縦」に回転させること。タオルの端の重なり位置が変わらないのでスムーズに拭ける



新津さんが考案したマイクロファイバー製の「万能お掃除クロス」。水で拭くだけで汚れが落ち、軽くて扱いやすい。ポケット付きなのでスマートフォンなどを包んでカバンに入れておくと、すぐに使えて便利





掃除の変化と「拭く」のゆくえ

「三種の神器」という言葉がある。1950年代半ばの「電気洗濯機、電気冷蔵庫、電気掃除機」がその嚆矢だが、電気掃除機は掃除にかかる労力を軽減した。今は自走式の掃除機さえある。今回のテーマ「拭く」を掃除の一環として捉えるならば、科学の進歩によって生じた「掃除の変化」をどう読み解くべきなのか、さらに「拭く」行為は今後どうなっていくのか。社会学者の永井良和さんにお聞きした。

撮影協力：昭和の暮らし博物館

清水の舞台に大型掃除機？ 変わりゆく現代の掃除

私がある新聞で連載したコラムで「掃除の情景」と題し、今の時代の掃除について記したことがあります。

きっかけはある朝のテレビニュースでした。中継映像に映った京都の清水寺の舞台で、大型掃除機を使って掃除しているのを見たのです。それは京都の古いお寺には似つかわしくない情景だったので、印象に残りました。

今の時代、お寺でインターネットを使ったり、お坊さんが携帯電話を持ち歩いていることはもちろん知っています。観光客増加の影響で、清水の舞台の上にもこれまでに以上に土やほこりが持ち込まれているであろうことも、少し考えれば想像できました。それでも、京都のお寺さんだったら、掃除は修行のために若い小僧さんがやっているような気がしていたのです。このイメージの落差がおもしろい



インタビュー
永井良和さん
関西大学社会学部教授
現代民俗研究会会員

Yoshikazu Nagai

1960年兵庫県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程(社会学)学修退学。専門は大衆文化論・都市社会学。著書に『社交ダンスと日本人』(晶文社)、『南沙織がいたころ』(朝日新書)、共著に『南海ホークスがあったころ』(河出文庫)など。

など。それで、掃除が今どのようなふうに変わってきているのかを少し考えてみました。

家業の造園業を継ぐことを決め、その手伝いを始めたという教え子に聞いたので、新米の彼にどんな仕事を任されているかを聞くと、「切り落としした枝や葉などをブロワという送風機を使って集めている」と言いました。庭師という職人の道を歩きはじめた彼の最初の仕事がそうした機械を操るものだという話も、清水の舞台で見た掃除機と同じような違和感を覚えました。改めて見回すと、大学内の落ち葉もブロワを使って集めていることに気づきました。また、集めた落ち葉はビニール袋などに入れて回収先に運ばれています。箒で落ち葉を集めて燃やし、芋を焼くということも行なわれなくなりました。

家のなかでも似たような変化が起きています。昔の日本家屋なら

ば縁側などから塵芥ちりあかを屋外に掃き出すことができませんでした。今は掃除機で袋に閉じ込めて捨てるのが一般的です。ごみを自分たちの手で、身近なところで処理することが減っている

わけです。これらはアスファルトやコンクリートで覆われて土が露出した地面が減ったこと、密閉性の高い家屋が増えたことによるものだと思います。

ごみの総量が増え、掃除をより迅速に終わらせる必要が生じて技術が進歩し、さらにアスファルト舗装や高气密住宅がもたらす便利さが広まるという社会の変化に伴って、掃除も変わっているのです。

布の再利用と洋室化で減りつつある「拭く」

「拭く」という行為は、掃除と近い関係にありますから、社会の変化の影響を多分に受けていると思います。私は1960年生まれます。家の掃除といえば雑巾拭きが基本という時代を生きたので、電化製品を使わない掃除にもある程度なじみがあります。そこから掃除機やモップ、さらには使い捨

てできる掃除用具などが現れて、さらに殺菌や除菌といった機能が加えられていく。そんな変化を目にしてきた世代なのです。

一方、私の世代が受け継ぐことができている部分もあります。それは布のリサイクルです。かつては外出用の着物、日常着、子ども用と服が傷むごとに仕立て直して、さらにはハタキの先の布になり、食卓や水回りなどを拭く布巾、床を拭く雑巾になっていく「再利用の文化」があったと聞きます。

一枚の布を大事にして最後まで使いきる。拭くという行為が、最後の過程と結びついている感覚は、雑巾を買うようにもなった私たち以降の世代ではすでに失われているはずだ。

拭く行為の背景としての変化には「和室のない住まい」の広がりもあります。少し前は、3LDKのマンションならば少なくとも1部屋は和室でしたが、最近はずべてフローリングで、和室はオプションとして設定されているケースも散見されます。先日200人くらいの学生たちの授業で、実家に和室があるかを尋ねたところ、手を挙げた学生は1割もいませんでした。和室がなくなれば、畳の目に沿って箒で掃き、雑巾がけをするというような掃除の文化が受け

継がれることは難しくなるでしょう。

布のリサイクル、和室での拭き掃除といった文化の断絶は、残念ではありますがしかたがないことにも思います。伝統からよい部分を学び、取り入れるのはすばらしいことですが、今、そしてこれからは生きる人たちに和裁や和室での生活を強いるのは現実的ではないですね。

裸足の習慣があるから「拭く」は消えない

では、古くからある掃除や拭く文化は、なくなっていく一方なのでしょうか。私は当面は守られる一線があるように思います。それは、日本には「玄関で靴を脱ぐ」という習慣があるからです。

ベッドの上以外は屋内でも靴を履く暮らしならば、部屋のなかに持ち込まれて溜まる塵芥は増えます。拭いたとしてもすぐに汚れてしまうので、毎日床を拭いてきれいに保つことはあまり合理的ではありません。しかし、玄関で靴を脱ぎ、持ち込まれる塵芥を抑えれば、拭き掃除をしたあとも美しく保たれる時間が長くなります。「靴を脱いで上がるのだからきれいにしておきたい」という心理も働く

でしょう。これらが拭き掃除に合理性をもたらす限り、生活における拭き掃除の位置づけは大きく変わらなないのではないのでしょうか。

玄関で靴を脱ぐ暮らしが消えそ
うな気配はあまりないですね。むしろ中国などの海外でも採り入れられているとの話を聞くぐらいです。靴を脱ぐ文化が維持されていることは、大事なポイントになるような気がします。

社会の変化に伴い、掃除や拭く文化が「消える」「残る」という見方で話を進めましたが、「新たに生まれる」ことがないのか考えてみるとときに思い浮かんだのが、自走型掃除機でした。フロアリングや床に座らないライフスタイルが広まり、かなり普及してきていますよね。開発したのはアメリカの企業で、軍用ロボットの開発において豊富な実績があるそうです。自走型掃除機は日本の掃除文化とはまったく違うルーツをもつ商品といえます。

私も1台持っています。若干大雑把なのは否めないのですが、そもそも軍用だったと聞けばそれも致し方ないのかなと思いつつ愛用しています。自走型掃除機は、最初がごみやほこりを吸いとるだけでしたが、なんと後継機が拭き掃除に対応したのです。これはま

ったく違うルーツをもつ技術が、「和室は減ったけれども拭き掃除は健在」という今の日本にうまくフィットする方向に進化したという、なかなか楽しい話です。このように、新たに生まれる拭く文化もあるようです。

「濡れたもので拭く」に こだわる理由

最後に、濡れたもので拭くという行為は、その背景や合理性のみによって存在しているものなのか、その行為自体に意味はないのか、そのあたりを考えたと思います。布を水に浸して拭き、それを洗ってまた拭くという行為に、「水で浄める」「穢れを水に流す」といった古の文化の気配を感じないわけではありません。しかし、日常的にそう考えて拭いている人はほほいさないでしょう。現実とはかけ離れていますからね。

基本的には、ごみやほこりを集めるうえで効率性が、濡れたもので拭くことを人々が選んでいる理由だと思えます。雑巾を洗って水に流すという汚れの処理も、落ち葉を燃やしたり、箒で塵芥を縁側から掃き出したりすると感覚的には似ていて、なじみがいいように感じます。

ただし、汚れの程度にかかわらず「掃除の最後は濡れたもので拭いておきたい」というこだわりには、若干の特別性があるのは理解できます。

民俗学者の柳田國男は、「日本人はなぜ糊で固めたパリパリの浴衣を着るのか」を考え、着物のルーツにその理由を見出しました。今でこそ浴衣は木綿ですが、かつて日本ではシナノキのような木の皮から繊維を取り出して衣服をこしらえていました。当然ゴワゴワしていて痛いぐらいに硬いわけですが、風通しがいいというメリットもあったのです。こういう素材ならば、高温多湿な日本の夏でも汗で衣服が体にまとわりつかない浴衣に糊をあてるのはその名残だと言うのです。しかし今ではそうした機能的な理由を知らずとも、浴衣はパリパリにして着るのがあたりまえだと思っている人がほとんどでしょう。掃除の最後は濡れたもので拭くことにこだわるのも、これと重なります。理由をもって普及した文化が、生活に根づいて感覚化し、状況が多少変化してもその感覚だけは強く残っている――。そんな

現象なのかもしれません。

この感覚は、祖父や祖母と拭き掃除をした経験があり、母親が濡れた布巾で食卓をきれいにするのを見てきたような世代ならば、普通に受け継ぐでしょうね。雑巾や布巾は使わずとも、ティッシュペーパーにアルコールを吹きかけて拭く世代も、ギリギリ受け継ぐでしょう。しかし、その先はどうなるかわかりません。私の世代がその行く末を見届けるのは、ちょっと難しそうですね。

(2017年12月14日取材)



現代社会



「玄関で靴を脱ぐ」という習慣がある限り、「拭く」行為はなくなるまいだろう

「拭く」と「水」の切り離せない関係

編集部

拭く行為における日本の水事情

なぜ人は「拭く」のだろうか。そんな疑問からスタートした今回の特集。水や水分が介在することも多い拭くという行為を考えると、その裏に何か関係性があるのではないかと取材を重ねた結果、見えてきたことがある。

山折哲雄さんはインドのベナレスの温泉を例にしつつ、「日本の温泉もかつては外面と内面の穢れを同時に洗い流し、拭い去る場所だった」と指摘した。拭き掃除の基本は水拭きと考える小泉和子さんは、その理由として日本ならではの「多湿な風土」と「水に恵まれた環境」を挙げた。自然を神聖視する日本で穢れを落とし浄めるには、やはり水が不可欠なのだ。

そして、「水がふんだんに使える日本の今の環境が少し特殊なのかもしれない」と考えさせられたのは、鈴木楨宏さんが国際結婚のトラブル例として明かした「食器の洗い方の違い」。水の使い方に対する根本的な違いを感じる。

一方、家庭紙の歴史を研究する関野勉さんには、世界中の拭

く道具が多様であることを教えられた。日本と同じように紙を使って拭く人たちは、想像していたよりもずっと少ない。その国の経済状況もさることながら、紙はそもそも水が乏しいとつくれないという事実は、気候風土が拭く行為にも少なからぬ影響を与えることを示している。

住宅の変化に伴う拭く道具の変容

拭く行為を考えるとときに外せないのは「道具」だ。小泉さんがつまびらかにしたように、拭く道具は時代とともに変わっている。

例えば拭く道具の代表格ともいえる雑巾に異変が起きている。大型の雑貨店や100円ショップの棚を見ると雑巾の種類の少なさに驚くだろう。

代わりに、機能性のある化学繊維を用いた布や、膝をつかず立ったまま床を拭くことができるモップタイプがバリエーション豊かに並ぶ。それは日本の住宅から畳のある部屋が減り、フローリングが中心となったからだ。さらに、住宅の構造そのものがひと昔前に比べると大きく変わっている。

それに気づかされたのは、展示撮影のために訪れたダスキニミュージアムでのこと。ダスキンのモップといえば黄色のイメージがあるけれど、今は赤色や紫色などの濃色である。なぜか？

かつて日本の住宅は隙間が多く、室内の塵芥は外から舞い込む砂ほこりが主だった。だから砂を認識しやすいようにモップは黄色とした。ところが今は、冷暖房の効率を高めるために建具や天井、床とのジョイント部分の隙間を少なくした高気密住宅が広まり、塵芥は砂ではなく綿ほこりが中心となった。綿ほこりがきちんととれているかを確認するには、黄色よりも赤色や紫色の方がよく見える。

このように、拭く道具は今も刻々と変わりつづけている。しかし、使う側の心理面では変わらないものもある。

「清浄文化」をキーワードとする花王が1994年に発売したフローリング用の「クイックルワイパー」は、「いつでも、誰でも、サッと手軽に使える」製品として広く用いられているが、発売当初はドライシート（乾式）のみだった。ところが「濡れた

もので拭きたい」という要望が多く、ウェットシート（湿式）を「後出し」する。これが好評を得て、現在のシェアはほぼ半々という。

永井良和さんが述べた「濡れたもので拭きたい」という日本人のこだわりは、ここにも現れている。

アナログ的でも理にかなった行為

最近、汗拭きシートを使う男性が増えている。スマートフォン（スマホ）をこまめに拭く人も多い。スマホは数十年前には考えられなかった「夢のような道具」だが、熱中しすぎると危ういこともある。その一つは、鈴木さんが言及した「今、ここ」という感覚が薄れることだろう。

「Z・1グランプリ」でタイムトライアルを終えて、クタクタなのに笑みがこぼれる参加者の表情は実に清々しかった。時間にしてほんの数秒でも、邪念がなく、拭くことに集中することがある種の浄化をもたらすのではないか。真剣に拭いて、意識を「今、ここ」に集中することは理にかなった行為といえよう。また、拭いて手入れをすれば、

大事にしようという気も起きる。それは自分と周囲の生活を大事にすることにほかならない。手や体を使って拭くアナログな行為ともいえる雑巾がけが、今もなお禅宗の僧侶たちの修行の一環として行なわれていることにはきつと理由があるはずだ。

その雑巾について、当センターのWebサイト「水の風土記・人ネットワーク」にもご登場いただいた山口昌伴さんが、自著『水の道具誌』（岩波書店2006）のなかでこう記している。「水を吸って働く布きれ、その湿りが微塵をからめとる。保水する布きれ」

雑巾の特徴を、そして水との関係性を的確に捉えた表現だ。もちろん乾拭きにも大事な役目はあるけれど、私たちにはなぜか「最後は濡れたもので拭いてさっぱりしたい」という欲求がある。水を布に含ませ、その湿り気ではこりを拭い、そして水を介して流し去る。拭くという行為には、やはり水とは切っても切れない関係があった。そしてレバー一つで水がほとぼしる今の生活を当たり前と思わずに、拭くに事欠かない、恵まれた水環境そのものにも感謝したい。

生と死と共に流るる ガンジス川

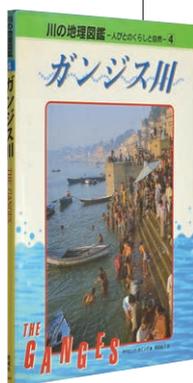
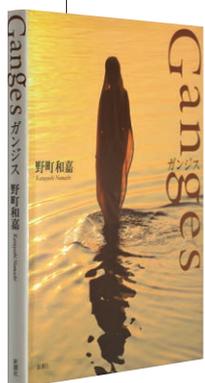
ガンジス川の流れ

ガンジス川の流れは、延長約2500km、流域面積約173万km²であり、その水源から河口まで、中国、ネパール、ブータン、インド、バングラデシュの5カ国を流域に抱える国際河川である。その流れを、児童書、デイビッド・カミング著『ガンジス川』(偕成社・1995年)から追ってみる。

ガンジス川の水源である、ヒマラヤ山脈のガンゴトリ氷河(標高4255m)から溶けた水が、バギーラティ川を下りアラカナダ川と合流し、ここからガンジス川となる。氷河から500km下るとハルドワールの町に入り、この地は氷河との標高差が3800mもあり、平坦な土地をゆったり流れる。ベンガル湾に注ぐまでの残りの約2000kmでは、高度差は300mしかない。ハルドワールに1854年に建設された上ガンジス用水路は、灌漑用水として60万7500haを潤し、水力発電用のダムにも使われている。ガンジス川は、バラナシ(ベナレス)を下り、さらに、沐浴の街パトナでは、ガガラ川、ガンダク川、ソン川などと合流する。大河になったガンジス川はヒンドスタン平原を蛇行しながら流れ、このあたりは頻繁に氾濫し流れを変えてしまったところである。

パトナから下ると、ガンジス川は、二つの流れに分かれる。一つはインドの国境を越え、ブラマプトラ川と合流してバングラデシュに向かって流れるパドマ川、もう一つは南へ向かうフーグリ川である。ガンジス川の河口(パドマ川・フーグリ川)は、7700km²に及ぶ広大なデルタ地帯である。川は、たくさん細い流れになって50以上もある島の間を迷路のように流れる。海水と混じり合った世界最大級のマンングローブの密林が広がる。また、上流からの土砂の流れが海底扇状地を形成している。

ガンジスの気候は、冬は温暖で雨はほとんど降らない。春は日中の気温が40℃まで上がる。夏はモンスーンの影響で、ヒンドスタン平原で300〜400mmほど雨が降り、モンスーンの勢力が強すぎると、バングラデシュは低平地のため国土の80%が水びたしとなる。インドの農業はモンスーンの雨が頼りで、雨が少ないと1500万人の農民が失業するという。



古賀 邦雄

こが くにお

古賀河川図書館長
水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団(現・独立行政法人水資源機構)に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

ガンジス巡礼

ジーナ・ダグラス著『ガンジス川』(帝國書院・1987年)では、ガンジスの流れに沿って、都市を紹介する。最初の聖地プラーヤグから下り、ハルドワールで「ビシュヌ神の門」という峡谷を抜け出てカーンプルを下り、デリーやアグラの都市を流れてきたジャナム川がガンジス川と合流するアラハバードは、聖地であり、陰暦の12年ごとに行なわれるクンブメラの祭りでは、最盛時には1000万人が沐浴したという。さらに下り、シヴァの神の都バラナシは川幅が広くなり、釈迦が初説法したことで知られ、巡礼者の聖地である。ガンジス川はパトナを下り、モンギールを過ぎ、デルタ地帯のパングラデシュに入り、ベンガル湾に注ぎ、延長2500kmの旅を終える。

インドの人口は、2013年現在13億3900万人で、そのうちの約78%がヒンドゥー教徒である。ヒンドゥー教は、身分の低い階級の者でも、生きていく間よいことをしておけば、死んだ後でも生まれ変わると信じられている。たくさん神が崇拝される多神教である。ヒンドゥー教では、ガンジス川は神聖な川となされ、教徒たちは、毎日ガンガーの女神に祈りを捧げ、死後は死体を焼いた灰を川にまいてほしいとの願いをもっている。

中村元・肥塚隆著『ガンジスの聖地』(講談社・1979年)には、「ガンジス川の降下」の神話が記されている。ガンジス川は、元は天界のメーラ山頂にあるブラフマー神の都城を巡って流れる川であったが、バギーラタの長年にわたる苛酷な苦行によってシヴァ神の頭上に降り、その頭髮から地上に流れ出したという。ガンジス川は、すべての汚れと罪を洗い流してくれる地上の聖河となり、巡礼者はガンジス川の沐浴祭に参加する。児童書として、寮美千子・文『天からおりてきた河ーインド・ガンジス神話』(長崎出版・2013年)がある。

直田龍作者『河への祈り ガンジス巡礼』(クレオ・1997年)は、ガンジス川源流ゴームクから小川で洗濯する女たち(スキ村)、沐浴祭で野営する巡礼者(プラーヤグ)、ガンジス川に祈りを捧げる男(バラナシ)、茶毘に付される死者(コルカタ)、水を運ぶ女と農村の風景(ハルディー)、祭りの

日、聖なる水を被る女達（ガンガサーガル）など、沐浴で輪廻に生きる人々を捉える。巡礼者の若者が、老いた母を川まで運び、沐浴させて、そこで安らかな死を迎えさせるのが親孝行と言われる。

同様に、ラグビール・シン著『ガンジス』（岩波書店・1992年）は、ガンジスの巡礼者を撮った写真集であるが、あえて、その道すがらの風景として、ガンゴトリ水河、ガンゴトの滝、ダム計画（テリリ）、村の学校（シシギラプール）、穀倉（パトナ）、モンズーンの雨に遭った女達（モンギール）、チェスをさす人（バラナシ）、漁師と小舟（西ベンガル）、ハウラ橋のラッシュユアワー（コルカタ）、トラクックに描かれた川に浮かぶ船（バンガラデシユ）、帆かけ舟とフェリー・ボート（バンガラデシユ河口部）などを追っている。これらの光景は巡礼者たちと密接にかかわっている。洪水の川に浸りながら、なお、祈りつづける巡礼者には驚く。

野町和嘉著『ガンジス』（新潮社・2011年）は、ガンジス川での巡礼者沐浴の写真集である。ヒマラヤ・水河の一滴よりはじまる神話、クンプメラ・奇跡の水、いのちの輝き、バラナシ・彼岸と此岸を結ぶガート、ビハール・田園を貫く巡礼の道、ベンガル・大河の終焉、永遠の大海へと、穢れを流す数千万の巡礼者の生と死を3年間にわたって執拗に写し出す。

この書の終わりに、野町和嘉氏は述べている。

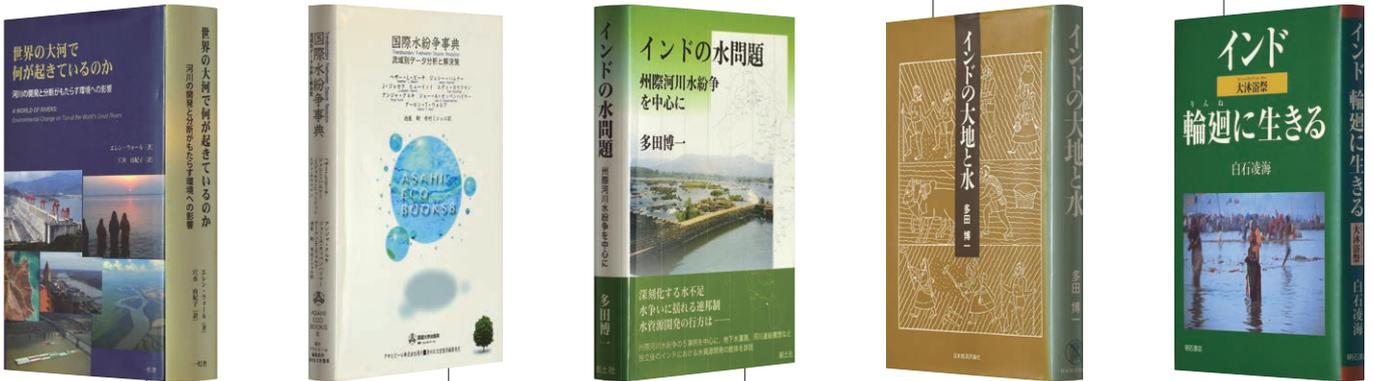
「ヒマラヤの雪解け水が始まるガンジスの流れ、生命を育み、人々の願望と来世への祈りを託されて流れゆく間に、その底流には、インド社会に堆積した悲惨や汚穢からなる泥の層を堆積させ、河口へと押し流してきたのである。恍惚の沐浴絵図を眺めながら、おびただしい数の巡礼者たちがこうして一同に祈ることによって、彼ら自身の心の浄化の一方で、汚穢を底流に含んだガンジスの流れを、じつは精神のフィルターにより、浄め海に還しているのではないか、と思えるようになった。そう、浄化された水はやがて天にのぼり、モンズーンの雨となってヒマラヤの峰々に降り注ぎ、ガンジスの聖水として甦るのである。ガンガール女神、永遠の輪廻転生。」

白石凌海著『インド 輪廻に生きる 大沐浴祭』（明石書店・2002年）によると、人生生老病死であり、死すべき時が来たとき、インドの古い聖典には、死への決心をして、東北に旅立つ。肉体を放棄した者は、悲しみと恐れのない、梵天に向上するという。ガンジスの流れに浸り、ただガンガールの女神に祈りつづける、それがまた輪廻転生につながるのであらうか。

インドの農業用水と水問題

インドの灌漑地面積は、1985年において純作付面積1億4000万haの30%にあたる4200万haが灌漑されている。多田博一著『インドの大地と水』（日本経済評論社・1992年）には、灌漑用水として、ヤムナー河から分水する西ヤムナー用水路、東ヤムナー用水路、ガンガール河から引水する上ガンガール用水路などにより、導水されているとある。

イギリス統治下における近代的な河川用水路の灌漑技術の確立過程、ガ



ンガール用水路建設などのイギリスにおける灌漑技術の拡大、独立後のインドにおける灌漑技術の問題（連邦と州との関係、政府灌漑施設の維持管理）などを述べる。

同著『インドの水問題—州際河川水紛争を中心に』（創土社・2005年）では、1947年イギリス植民地から独立後、インドの人口は増加の一途をたどり、産業の発展に伴い水の需要もまた増大し、州際の水紛争が生じた。インド政府は1956年州際水紛争法を制定し、州際河川、流域の水資源保全、灌漑、排水、水力発電、舟運、植林、土壌保全、水質汚濁防止を図っている。五つの河川、クリシュナー河、ゴダーヴァリ河、ラーヴィー・ピアース河、ナルマダー河はこの法が適用された。水不足に対応するために、河川連結・流域変更のことも詳述する。

ガンジス川の国際水紛争

インドでは州際の水紛争の協議がなされているものの、ガンジス川は国際河川であることから、中国、ネパール、ブータン、バンガラデシユとの国家間の利害の争いは絶えない。

ヘザー・L・ビーチ他著『国際水紛争事典』（アサヒビール・2003年）、アシット・K・ビスワス／橋本強司編著『21世紀のアジア国際河川開発』（勁草書房・1999年）により、水紛争を見てみたい。インドはバンガラデシユの合意なしに、ガンジス川分流のファラッカにダムを建設・運営している。このため、「ガンジス川水協定」が締結された。ファラッカにおいてガンジス川の水を分け合うこと、乾期におけるガンジス川の増水について、長期的な解決策を編み出すこと。なお、協議が続いている。

エレン・ウォール著（穴水由紀子訳）『世界の大河で何が起きているのか—河川の開発と分断がもたらす環境への影響』（二灯舎・2015年）は、インドのファラッカダムがバンガラデシユに悪影響を及ぼしていることは河川改修を巡る問題であり、特に乾期の流量が少ない期間に国家間および地域間で水を公平に分配することの必要性を、さらにガンジス川沿岸の洪水被害を減らす必要性を説いている。

バンガラデシユの洪水対策については、リバーフロント整備センター編・発行『FRONT 特集ガンジス河』（2003年）で、井山聡氏は、各国の援助により、NGOと住民の連携による、避難場所兼学校、道路の建設などの洪水対策、あるいは職業訓練、小規模融資などの生活上対策を図り、住民の自助、互助の力も引き出させるシステムづくりが肝要であると説く。

最後に、洪水にめげずに生活する人々の姿を描く、写真・吉村 繁／文・白石かずこ、白田雅之『水と大地の詩—バンガラデシユ』（岩波書店・1995年）を掲げる。生と死を共に流るるガンジス川の流れに想いは尽きない。

（ガンジスは動詞の川を磨く体を洗う洗濯物をする）

（俄万智者『チョコレート革命』より）

実は同じ発想の ジェラートとカクテル

小豆島には土庄港、池田港、草壁港、坂手港、福田港、大部港といくつもの港があり、瀬戸内海の中継点だ。各港まちが高松や神戸、姫路、日生、岡山と結ばれ、取引相手地との関係が共存しつつ、全体としては海に囲まれ隔絶しているという、中継点としての島によく見られる特徴があるようだ。

まず訪れたのは、草壁港の海沿いに建つしゃれた古民家店舗。昼間は若い観光客で混雑する「MINORI GELATO（ミノリジェラート）」だ。レモン、チョコといった定番商品のほかにもしょうゆ、生姜、アスパラといった地元野菜のジェラートが並んでいる。焼きナスのジェラートを食べたが、隠し味のしょうゆが甘みを強めうまい。

この製造を担当するのが市川雅史さんだ。東京でソムリエやバーテンダーとして20年間過ごし、2年前に移住した。小豆島の魅力を質問すると、「食材の豊かさがすばらしい。オリーブの木がそこらじゅうにあるし、レモンの木もある。瀬戸内の魚介類も独特で、東京で流通しない地元だけのものも多く、おいしい」と話す。

野菜は毎朝地元農家から仕入れる。形は悪いけど質はよい野菜を持ち込み「何とか活かせないか」と言う方もいる。そうしたいいろいろな朝摘み野菜・果物を仕入れるのだが、なぜジェラート屋さんに？「ジェラートとカクテルの発想は同じです」と市川さんは言う。

バーテンダーは即興的にその場の素材の持ち味を引き出しカクテルをつくる。それを液体として出すか、ジェラートとして出すかの違いだけで、実は同じというのだ。「バーテンダーは素材をおいしく処理するプロ」。聞いて納得だが、これは素材からもっとも高い付加価値を生む仕事との意味でもある。だからこそ市川さんの存在は貴重だ。自ら人気店を運営し、農家にとっては流通しづらい野菜・果物に価値を与える存在だからだ。

しょうゆの郷は 「菌の郷」だった

「質が新たな価値を生む」という言葉が頭に浮かびつつ次に伺ったのが、「醬の郷」と名づけられたしょうゆ蔵の集積地である。しょうゆは小豆島の伝統的地場産業。小豆島醤油協同組合には14社が加入しているが、全国で一番木桶が使われている産地ということあまり知られていない。ここで木桶のしょうゆにこだわり、木桶づくりまで手がけるヤマロク醤油五代目社長の山本康夫さんにお会いした。

蔵の入口から中を見ると両側に大きな木桶が並ぶ。驚いたのは、間近に見ると、桶がふっくらとした綿をまとっていること。「それは菌です。他のしょうゆ蔵とは菌の種類や生態系が違うそうですが、これがなくてはうちの味になりません」。綿の正体は菌だった。

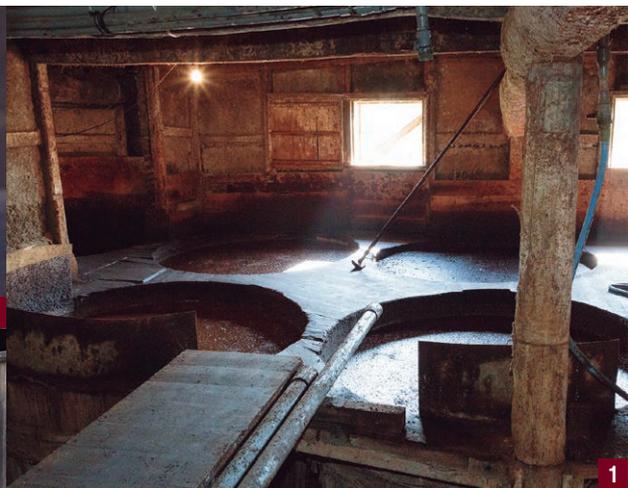
「うちには桶が66本あります。人力で行なう攪拌は大変ですが、それをしないといいしょうゆにならない。菌がしょうゆをつくるので、攪拌はその手伝いです」という言葉を、私は桶の綿を見て納得した。大きなステンレスタンクで醸造する場合、タンクは生産のための貯蔵容器である。しかし、ヤマロク醤油では、菌が棲む木桶と蔵、さらには菌が浮遊する島の風土を、うまいしょうゆをつくる資本と見なしているのだ。

したがって、山本さんに島でしょうゆ事業を続ける理由を聞くと「ここで木桶でつくるとうまいからです。木桶を残さないと孫、ひ孫の代にこの味がなくなる。うちで木桶づくりを始めたのは本物の味を残すためです。孫やひ孫が墓参りに来て、あの祖父さんの時に



1 MINORI GELATOで提供するジェラート。3種盛りが500円で味わえる 2 MINORI GELATOのソムリエ、市川雅史さん。「これ使える？」と農家の人から持ち込まれる素材を商品化する。そうした「顔の見える関係も楽しい」と言う。ジェラートづくりはイタリア・ポーロニャで学んだ 3 小豆島の素材を活かした多種多様なジェラート。朝採れた野菜がその日のうちにジェラートとなってケースに並ぶ 4 米蔵だった倉庫を改修したMINORI GELATO





1 木桶にこだわりしょうゆづくりを続けるヤマロク醤油の蔵。木桶は66本ある 2 木桶の表面はふわふわとした綿のようになっている。これは菌が棲みついてから 3 4 ヤマロク醤油が生み出すしょうゆ。生産量は増やせないで、直販率を高めて利益を確保している。パッケージにもしょうゆづくりに対するこだわりが記されている 5 新桶をつくるために仕入れた吉野杉の木材。厚さは一般的な材より分厚く10~11cmある 6 敷地の入口にはかつて使っていた木桶が置かれている。訪れる人たちはここで撮影する 7 自ら組み立てた新桶の前で話すヤマロク醤油五代目の山本康夫さん



小豆島で本格的にオリーブが栽培されるようになったのは明治時代末期だ。日露戦争後、日本は北方漁場を獲得したが、そこで水揚げした魚介類の保存・輸送のため油漬が必要となった。この油となるオリーブオイルを自給しよう(明治41)、三重、小豆島、鹿児島で試験栽培され、唯一うまくいったのが小豆島。搾油がスタートした

オリーブの量ではなく あくまでも質で勝負

この幸運を生む構図は、オリーブでも同じであった。うゆの時間感覚に納得しつつも、山本さんという「質にこだわるおもしろい事業者」がいるから、現在もうまいしょうゆにありつけていることにホッとしてしまう。

桶屋がなくなったからもうつくれんわ、と言われたら腹が立つじゃないですか」と言うのも当然だ。とはいえ木桶は壊滅的な状況だ。山本さんは、大工の友人たちと木桶をつくりはじめた。材は吉野杉。たまたま島を訪れた吉野の林業者と出会い、取引が始まった。一般に企業は年単位で収益を考えるが、しょうゆ屋は「代」単位で収益と循環を考える。山としょうゆの時間感覚に納得しつつも、山本さんという「質にこだわるおもしろい事業者」がいるから、現在もうまいしょうゆにありつけていることにホッとしてしまう。

1988年(平成10)、井上さんは小豆島のオリーブ関係者の一員としてスペイン・アンダルシア州ハエンの生産地を視察した。そこで目にしたのは広大な敷地でオリーブが大量生産される姿。井上さんは「これは勝てない。いくら合理化しようと、小豆島中にオリー

が、1959年(昭和34)のオリーブ製品輸入自由化を機に、輸入品に押され生産は減少していく。このような歴史をもつオリーブだが、現在は食用油や化粧品原料として高値で取引されている。とかく作物そのものを売ろうとする傾向の強い日本の農業で、オリーブは少数派だろう。その経緯を農業法人井上誠耕園園主の井上智博さんに聞いた。

井上さんの祖父が柑橘の栽培に始まり、オリーブを植えたのは1946年(昭和21)。1964年(昭和39)に生まれた井上さんは若い頃、神戸中央卸売市場青果物の仲間だった経験をもつ。1980年代前半、当時の小豆島の柑橘類は量が少なく弱小産地扱いされ、市場で買い叩かれていたのを見た。1980年代後半に井上さんは実家に戻るが、当時のオリーブ市場は小さいうえに先発企業が何軒かあり、参入しても商売にならなかつたという。そこに転機が訪れる。

参考文献

香川県小豆島町「小豆島オリーブ検定公式テキスト」(香川県小豆島町オリーブ課 2008)

（魅力づくりの教え）
質にこだわる、頑固でももし
るい工夫を施す事業者は、そ
の土地を元気にする。

ブを植えようと無理。量で攻められないのなら、品質で勝負しよう」と決めたのだ。井上さんは、オリブの木を三分割して、上部を「天成り」、中部を「懐成り」、下部を「裾成り」と名前をつけた。そして天成りの実を搾った極上モノとして化粧用オイルをつくった。「おやじは百姓ですけれど、農業試験場の先生に『オリブオイルは食べてよし、塗ってよし』と言われ、50年以上前に化粧品製造許可をとった。これはおやじの金星ですね」と言う。

「商業ベースで見ると島はありがたい。よいイメージをもたれてほしい島です。わかってくるとすばらしい島ですよ。そうするために先人がどれだけ苦労したのが理解できる。この島を次の世代に伝えていかないと」と言う井上さんは、小豆島の農地だけではなく、島の観光イメージも資本と見なししている。だからこそ観光客にオリブに浸ってもらうためのレストラン・店舗をつくり、新たな小豆

島のイメージを発信している。ここにも質にこだわる事業者の姿があった。

質にこだわる 競争と共存の島

地域資源という言葉をよくの人が使う。小豆島ならば、オリブやしょうゆを挙げる人もいる。でも、今回わかったのは、頑固な事業者が農産品というモノに質を与えるために格闘して工夫したこと。魅力が付加されている事実だ。まさに「質にこだわらずにはいけない文化」が小豆島にはある。そして、三人とも「食材と風土のすばらしさ」を指摘する一方、「市場で埋もれてしまふ危機感」という共通経験をもっていた。

瀬戸内海でゆるく隔絶された小豆島という中継地。そのなかに、対岸消費地との結びつきを背景にした競争と、事業を続けるのに必要な「質を高めるために、工夫せずにはいられない文化」から生まれる島内事業者の共存を読みとることは、いきすぎた想像かもしれない。しかし、質を高めるプラットフォームが生まれつつある小豆島は、現在に通じる地域づくりの先進例と私には思える。

（2017年10月26〜28日取材）



1オリブの果実を丁寧に扱い搾ることで品質が変わると言う 2井上誠耕園のオリブ畑。収穫シーズンだったので大勢のスタッフが忙しそうに働いていた 3「農業で小豆島を元気にしたい」と語る井上誠耕園の園主、井上智博さん。オリブの魅力をより深く知ってもらおうと、オリブ専門店とレストランの複合観光施設「らしく本館」をオープンした 4「らしく本館」の外観。2017年4月にオープンしたばかりだが、平日でも来店者が後を絶たない 5 6「らしく本館」2階のレストラン「忠左衛門」で提供するパスタ。テーブルには種類の異なるオリブオイルが並べられているので、実際に味わってから1階のオリブ専門店「mother's」で買うこともできる 7 8 9 10収穫したオリブの果実はまず水で洗う。そして砕いてペースト状にしてから攪拌し、遠心分離器にかけてオイルを抽出する。オリブオイルになるのは実（重さ）の6〜7%

旬の食材を地元で味わおう せりしやぶ

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回は、宮城県名取市の伝統野菜「せり」を使った「せりしやぶ」です。せりは仙台市の周辺でお正月に欠かせない身近な野菜。ここ数年、仙台名物として脚光を浴びる「せり鍋」の元祖は、このせりしやぶなのです。

せりを丸ごと食べる
新名物「せりしやぶ」

あたり一面に、もわもわと茂る色鮮やかな緑のじゅうたんができています。仙台市中心部から南へ車で約30分。名取市下余田しもやうでんに広がる「せり田んぼ」だ。

全国屈指のせりの生産量を誇る宮城県のなかでも、名取市は約8割を占める主要な産地。名取でのせり栽培の歴史は古く、江戸時代中期に書かれた書物によれば、江戸時代初期の元和年間（1615・1624）頃から、野生のせりを改良して栽培が始まった記録が残る。

「名取でもせりが栽培できるところは限られているのです」と教えてくれたのは、一般社団法人名取市観光物産協会・事務局長の相原いづみさんだ。

「名取川の伏流水が湧き上がる上余田と下余田の2カ所でのみ、せりの栽培が行なわれています。水温が年間を通して約15度と一定であることも、せり栽培に好条件なのです」

この名取産のせりを丸ごと食べ尽くす鍋料理「せり鍋」が、新たな仙台名物として注目されている。2016年まで開催されていた「せんたい仙臺鍋まつり」では、せり鍋が2年連続でグランプリを受賞。毎



4



1



3

2



6

5

1 三浦隆弘さんのせり田んぼ。無農薬だからこそバランスのとれた生態系が維持できて、その結果せりが強く、おいしく育つ 2 せりを根ごと掘り出した三浦さん。在来作物を大事に育て、「せりしゃぶ」も生み出した 3 せり田んぼに注ぐ名取川の伏流水。この水なくしてせりは育たない 4 シンプルな味つけなのに苦味がまったくない、採れたてのせりサラダ 5,6 名取市観光物産協会事務局長の相原いづみさんと、同協会が入居している復興仮設店舗「関上さいかい市場」

週5000人以上が訪れるゆりあげ港朝市でも、テイクアウトのせり鍋が大人気だ。
「採れたてのせりの味を知ってもらうためにも、ぜひ名取に足を運んでいただければ」と、相原さんは今後の展望を話す。
実は、このせり鍋の元祖が「せりしゃぶ」だ。具材はせりのみ。どのようにして生まれたのか。

旬の在来作物を 地元でおいしく

出荷真っ盛りの12月下旬、名取市下余田で代々專業農家を営む三浦隆弘さんのせり田んぼを訪ねた。三浦さんはせりしゃぶ人気のきっかけをつくった人物である。環境NPOの活動に参加するほか、田んぼで自然体験ができる「なとり農と自然のがっこう」を主宰。2004年（平成16）頃から農業や化学肥料を使わない環境保全型のせりをつくりつづける。

「農家には地域の伝統を担うインフラプリアーのような役割があります」と三浦さんは言う。

「地方はそのときどきの国の政策に振り回されがちですが、肝の部分は何かを考えなければ〈代わりの利く存在〉になってしまいます。在来作物をつくる農家に生まれたからには、その土地でできること

があると思います」

地元の旬の食材を地元でおいしく味わってほしい。そんな三浦さんの考えに賛同する飲食店や消費者らと知恵を出し合い生まれたのが、せりしゃぶだった。行政や関係団体はかかわっていない、草の根からじわじわと湧きあがったムーブメントだ。

「私たちが大事にしているのはルートです。仙台名物に笹かまぼこや牛タンがありますが、原材料まですべて仙台ならではのものは多くありません。震災以降、県外から多くの方に支援で来ていただくなか『この地域ならではのものを迎えたい』というみんなの思いに、せりしゃぶがうまくはまったのだと思います」

三浦さんが今朝採れたばかりのせりを、塩・こしょうとオリーブオイルで和えたサラダにして振る舞ってくれた。せりを生でこれだけ味わったのは初めてだが、鼻に抜ける爽やかな香りとしやししゃきの食感がクセになる。「鮮度がいからこそその味ですよ」と三浦さんは笑う。

質のよいせりを育てる 地下水に恵まれた湿地

三浦さんのせりは、葉、茎、根まですべて柔らかくおいしいと、

せりの収穫から具材になるまで



1

せりを掘り出す



2

作業所に運び、名取川の伏流水を用いて洗う



3

洗ったせりは一株ずつチェックして枯れた部分などは取り除く



4

「せりしゃぶ」用にカットされた具材。震災以降、出荷したものがこの店にあるのが履歴を残す。また、放射能の自主検査も行ない、検査結果をSNSでアップしている

地元の目利きにも評判だ。肥料や品種など試行錯誤を重ねた結果でもあるが、三浦さんは「軟水であることと安定した水量が大きく関係しています」と言う。

下余田地区の中央部に旧河道を利用した用水路が走り、両脇に延びるせり田んぼにパイプを伝って地下水がかけ流されている。三浦さんが見せてくれた地下水位の変動図によると、栽培・収穫期こそ水位は下がるものの、毎年きちんと回復している。枯れない水脈があるからこそ、良質なせりの栽培を維持できているのだ。

そもそも湿地地帯だった上余田・下余田地区では稲作が難しく

だったので、せりをはじめレンコンやくわい、イグサなど、土地に合ったものを昔から栽培してきた。

せりの収穫風景を見せてもらった。水かさのある田んぼのなかに膝をついて腰までつかり、せりの束を根ごと掘り出す。収穫したせりは離れの作業場に運ばれ、選別する前に地下水の水圧を利用してザブザブ洗う。日が暮れると収穫作業はできないため、夜に洗浄作業を行なうそうだ。

きれいに洗ったせりは、枯れた葉や軟弱な茎などを取り除き、100g単位の束にして出荷される。収穫から出荷まで、すべて三浦さん家族による手作業だ。

一過性のブームで終わらせないために

せり鍋が注目されるなか、三浦さんが懸念することがある。何かブームになると、目先の売り上げを求めて本来の旬や地域性を失ってしまうことがままあるが、せり鍋も同じ道をたどる危険があるからだ。

「仙台周辺で採れたせりを地元で味わうのが本来のせりしゃぶですが、県外から仕入れたせりを提供する店が仙台に増えているのが悩ましいところです」と三浦さんは言葉を強くする。

「今の3〜5倍まで田んぼを広げ

ても売り上げは見込めると思いますが、持続可能性や味など失うものも大きいと思うんです。価値観を共有できる飲食店や消費者との関係性を、自分の手の届く範囲で大事にしていきたいです」

三浦さんが「本物のせりしゃぶを味わってほしいから」と仙台駅そばの割烹料理店「いな穂」に案内してくれた。いな穂の先代親方の稲辺勲さんが三浦さんの結婚式の二次会で料理を担当した縁で、13年前に三浦さんがせりを持ち込んで相談した店だ。

いな穂のせりしゃぶの具は、せりのみ。鴨肉でとっただしに生のせりをさっとくぐらせて味わう。驚いたのが、根っこの柔らかさと甘み。三浦さんいわく「根っこがいちばん栄養を吸っているからそれだけおいしい」。取材中、せりだけを食べつづけているのに、まったく飽きがこない。

「初めてのお客様は見た目の量に驚きますが、味わうとクセがなく、やはり根っこがおいしいと好評です」といな穂の親方、伊東一良さんは言う。

名取の伝統野菜を使った、新名物のせりしゃぶ。三浦さんたちのような存在がいる限り、一過性のブームでは終わらないはずだ。

(2017年12月21日取材)

瀬戸内の風土を反映した

効率的な水利用の 揖保川

川系男子坂本貴啓さんの案内で、編集部の方々 nationwide「一級河川「109水系」を巡り、川と人のかかわりを探りながら、川の個性を再発見していく連載です。

降水量の少ない 瀬戸内の川めぐり

揖保川は兵庫県南西部の播磨地域を流れる川で、加古川、市川、夢前川、千種川とともに播磨五川と呼ばれています。揖保川は瀬戸内海に流れ込む川で、雨が少なく温暖な気候帯が流域を覆っています。一見、利用の難しい川ですが、この中国山地と瀬戸内海に挟まれた揖保川を人々がどのように

水利用をしてきたのか、山地から海まで下りながら川とのつきあいを探りました。

徐々に川上まで広がる 人間の活動領域

揖保川の中流域までは中国山地が張り出しています。川の地形的にも険しい場所が多く、舟などの往來を遠ざける難所も存在しました。揖保川にも高瀬舟が上がって

109水系

1964年(昭和39)に制定された新河川法では、分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」(河川法第4条第1項)を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

坂本ケンと行く川巡り 第14回
Go! Go! 109水系



宍粟(しろう)市役所の対岸にある愛宕神社から見た揖保川と出石の舟着き場跡。この両岸がかつて高瀬舟で賑わったところ

きていましたが、中世くらいまでは下流域平野部の龍野（現・たつの市）付近まででした。中流域の出石（現・宍粟市山崎町）まで高瀬舟が行き来するようになったのは、1615年（元和元）以降に川の岩盤を取り除く工事が行なわれてからです。山崎城下町の商人が交易でまちが栄えることを期待して、自らお金を出して工事に組みました。これにより下流に集中していた交易など川を利用できる領域が広がりました。

江戸初期の難所工事で高瀬舟が上がるようになり、川湊として栄えた出石について、宍粟市教育委員会の田路正幸さんに話を伺いました。

「出石には、東西両岸に石積みみの舟着場が築かれ、舟間屋や倉庫、茶屋、旅館、飯屋などが立ち並び、宍粟の商業、流通の拠点として発展しました。出石の川湊の面影は今も宍粟市役所東の揖保川に窺い知ることができます」

宍粟市役所東の河川敷に降りると、川の中に下流に向かって張り出した石組みの舟着き場跡があり、ここが栄えていた川湊だったことの記憶をたどることができます。

人々は中国山地が阻んでいた揖保川の利用を歴史とともに可能にしてきました。近年では、上流域

に揖保川の工業用水の水がめの要である引原ダムができました。下流域だけでは事足らず、徐々に利用できる領域を広げていくのが人の貪欲さでもあり、水資源開発という文明でもあることが、上流の発展を紐解いて感じることができました。

川がかたちづくった扇状地に文化を育む

揖保川にも下流域の右岸側支流の十文字川に沿って、扇状地が形成されています。この地形をうまく利用して発展したのが龍野の城下町でした。山の上に龍野城が築かれ、山から下りるにつれて開ける扇状地に沿って城下は発達しました。龍野はどういう場所だったのか、たつの市龍野歴史文化資料館 学芸員の新宮義哲さんにお聞きしました。

「龍野は、城下町としての発展に加え、揖保川流域の港と山陽道・出雲街道が交差する交通要衝の地域を中心として栄えました。人や物資が行きかうなか、文化が醸成されたまちでありました」

龍野の情景を詠んだ文学碑などが多く残っています。この城下の風景に多くの人が文学的感性を刺激されたのでしょう。『赤とんぼ』



1 出石の舟着き場跡について説明する宍粟市教育委員会の田路正幸さん 2 保存された石積みみの舟着き場跡を歩く坂本さん。江戸時代の高瀬舟（復元）は浅瀬を通れるように舟底が平ら。下りは年貢米や麦、大豆、薪、炭などを、上りは肥料や塩、干魚、日用雑貨などを運んだ 3 龍野の歴史を語るたつの市立龍野歴史文化資料館の学芸員、新宮義哲さん



4 揖保川流域で素麺づくりが盛んだった理由を解説する兵庫県手延素麺協同組合 揖保乃糸資料館「そうめんの里」支配人の齋明寺啓介さん 5 素麺「揖保乃糸」の生産体制について話す兵庫県手延素麺協同組合の天川亮さん 6 揖保乃糸資料館のレストラン「庵」で提供する素麺。「揖保乃糸」の商標登録は1906年（明治39）までさかのぼる 7 揖保乃糸資料館では一日に数回、素麺の工程の一部を実演している





坂本 貴啓 さん

さかもと たかあき

国立研究開発法人
土木研究所
水環境研究グループ
自然共生研究センター
専門研究員

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味をもちはじめ、川に青春を捧げる。全国の河川市民団体に関する研究や川を活かしたまちづくりの調査研究活動を行なっている。筑波大学大学院システム情報工学研究科修了。白川直樹研究室「川と人」ゼミ出身。博士(工学)。2017年4月から現職。



揖保川

水系番号	: 64		
都道府県	: 兵庫県		
源流	: 藤無山 (1139 m)		
河口	: 播磨灘		
本川流路延長	: 70 km	75位 / 109	
支川数	: 47 河川	72位 / 109	
流域面積	: 810 km ²	76位 / 109	
流域耕地面積率	: 5.5 %	84位 / 109	
流域年平均降水量	: 1461.5 mm	84位 / 109	
基本高水流量	: 3900 m ³ /s	75位 / 109	
河口の基本高水流量	: 5204 m ³ /s	74位 / 109	
流域内人口	: 13万9843人	59位 / 109	
流域人口密度	: 173人 / km ²	48位 / 109	

播磨灘

【揖保川流域の地図】

国土交通省国土数値情報「河川データ(平成21年)、流域界データ(昭和52年)、ダムデータ(平成26年)、鉄道データ(平成28年)、高速道路データ(平成28年)」より編集部で作図

(基本高水流量観測地点: 龍野(河口から12.9km地点))
河口換算の基本高水流量 = 流域面積×比流量(基本高水流量÷基準点の集水面積)
データ出典: 「河川便覧 2002」(国際建設技術協会発行の日本河川図の裏面)

人が住みやすい場所のことを可住地といいます。揖保川は下流域

揖保川流域で素麺が発達した理由

という歌もその一つです。三木露風が故郷の龍野を懐かしんで歌にしたものですが、龍野城のある高台から龍野の風景を一望し、そこから見える揖保川沿いの人々の暮らしの風景がきつと彼の心に去来し、歌の情緒を生んだのだと思います。

に可住地が集中しています。これは古くも同じで、揖保川沿いの人々が暮らしの営みとしてもっとも利用しやすかったのが播州平野です。播州平野が発達した産業の一つに「素麺」があります。揖保川流域では約600年も前から素麺が食べられていて、素麺製造の古い歴史があります。揖保川の名は知らなくても「揖保乃糸」は聞いたことがあるのではないのでしょうか。

料を調達し、それを組合員である製造者に分配します。厳密なマニュアルに沿って製造から販売まで組合が一元管理するというしくみになっています。素麺はなぜこの地域で定着したのか。兵庫県手延素麺協同組合揖保乃糸資料館「そうめんの里」支配人の齋明寺啓介さん、同企画課の天川亮さんにお会いしました。「素麺がこの場所盛んにつくられるようになったのには理由があります。播州平野では小麦が多く栽培され、揖保川流域では水車製

川の領域と人の領域の区切り

川は濃密に利用されるがゆえに人々にとって身近な存在でありますが、身近ゆえに課題もありました。たつの市の揖保川の川沿いを走ると、約2kmにわたり橋の欄干のような柵が続いています。普通、川の堤防は台形状に土をこしらえてつくられますが、この地域は民家が川に近接して張りついているため、そのようなスペースがありません。そのため洪水時の一瞬だ

粉が盛んで良質の小麦粉が入手しやすく、近隣には赤穂の塩がありました。また揖保川の軟水は素麺づくりに最適で、冬に雨が少なく乾燥した瀬戸内気候も素麺製造に適していました。さらに揖保川の水運を利用した消費地への輸送といった条件もそろっていました。そして何より播州地方の人々の勤勉な気質が必要不可欠でした。農閑期に人々の労働力が素麺づくりに注がれて暮らしを形づくっていききました」と齋明寺さん。

け、川の領域と人の領域を区切る「**畳堤**」と呼ばれるものが昭和初期から発達してきました。畳堤について、姫路河川国道事務所の庄司周夫さん、城谷吉彦さんに話を伺いました。

「『コンクリートの壁をつくってしまくと、家から川が見えなくなり、圧迫感を受ける』という地域の人の声で、普段は川が見えて、いざという時は畳をはめて、浸水から守れるようにする構造になりました」

当時ほどの家にもあった「畳」が、いざという時に水防の資材になると最初に考えた人の発想には驚かされます。また、一つでも畳がはめ込めなければそこをきつかけに氾濫するわけですから、地域の団結した水防が行なわれる意志と覚悟がないとできないものです。

濃密な水利用を維持する 河川管理の難しさ

揖保川を水源とした水利用は多くの産物を生み出しましたが、よいことばかりではありませんでした。揖保川の水質は、一時期ひどく悪化しました。高度経済成長長期に林田川沿川の工場の排水などで水質汚染が深刻化し、全国ワースト3位となりました。濃密な水利

用の反作用です。

水質汚染の著しい川に対し、当時の建設省、兵庫県、姫路市、龍野市、太子町は清流ルネッサンス21という緊急的に水質を改善するための行動計画を策定し、下水道整備などを実施した結果、揖保川の水質は劇的に改善されました。しかし、今度は下水道が整備されたことなどで、雨が少ない冬季に林田川が枯れ川になってしまっ



8 揖保川に沿って延々と続く畳堤。畳堤は、日本でも揖保川と長良川(岐阜県)、五ヶ瀬川(宮崎県)にしかない 9 畳堤の構造。畳(京間・本間サイズ)を1枚ずつ差し込んでいく。畳は水分を含むと膨らむので強度が増すという利点もある 10 畳堤について坂本さんに説明する国土交通省近畿地方整備局 姫路河川国道事務所の城谷吉彦さん(中)と庄司周夫さん(右) 11 支流・林田川へ水を送り込む取水口



12 揖保川の歴史と現状について話すみんなの川 揖保川会の吉田忠弘さん 13 みんなの川 揖保川会の横田辰夫さんと坂本さん。二人は以前どこかで顔を合わせた記憶があるという 14 石倉が昨秋の台風で埋もれてしまったため、パワーショベルとクレーン車で掘り出す 15 水面下にうっすら見えるのが「石倉」。河口から3kmほどのところに2カ所(計30基)設置している。ウナギのモニタリング調査には市民も参加



16



18



17

16 揖保川の河口付近に広がる播磨臨海工業地域。素麺のほかにも薄口しょうゆや皮革産業も盛んなのは、揖保川の水と風土があればこそだ 17 工業用水道の水源となる集水埋渠(しゅうすいまいきよ)が地下に埋められている緑地帯。揖保川から播磨臨海工業地域まで続く 18 揖保川の取水口。播磨臨海工業地域まで工業用水として送られている

とも起こり、揖保川から水を農業用水路で引くという措置を講じます。流域で濃密な水利用が続けられるように奮闘する歴史を見て、河川管理の難しさを実感しました。

揖保川を身近に感じる ウナギの石倉づくり

川を利用し、川とともに暮らしが構築されてきていた揖保川周辺

の人々でしたが、ちょっと気になることも起きています。最近、川で遊ぶ子どもたちや親子も減ってきて、川の環境への関心が薄れています。川で何かよくない変化が起こっていても気がつきません。これらは川の抱える「無関心」という現代病です。揖保川も例外ではありません。

ここでは、漁業組合の方が中心となつて「みんなの川 揖保川会」

をつくり、「ひらかれた みんなの川」を理念に、揖保川の保全や子どもたちへの河川教育にも取り組んでいます。みんなの川揖保川会の横田辰夫さんと吉田忠弘さんにお聞きしました。

「揖保川では、これまで魚の産卵場づくりなど河川の環境・生態系にかかわる保全・再生活動を行なってきました。ただし漁協の活動だけでは、河川環境の回復は図れないのが現実で、流域に暮らす住民の協力がが必要です。そこで、最近ではみんなで保全活動を行なつて、ウナギの棲み処となる石倉づくりを始めました」

自分たちが石倉の設置を見届け、どのくらいの数のウナギが利用しているかを観察していくことは関心を高めることに直結します。活動を通して人々が揖保川をどう活用してかわかっていきたいかというところが見えてきそうです。

濃い川とのつきあいが 生み出したもの

揖保川流域は降水量が少なく、平野も少ない、水も伏流しやすい流域なので、捉え方によっては人が住みにくい地域です。しかし、揖保川の場合はそれを逆にとり、

制約された条件のなかで、あるものを効率的に利用し、独自の営みを形づくっていきました。上流域の難所を切り開いて発達させた舟運や素麺、薄口しょうゆ、皮革などの地場産業は高度利用の成果の現れでもあります。上流域の引原ダムで確保された工業用水は播磨臨海工業地域の発展に欠かせないことから、揖保川が水利用に貢献していることがわかります。

川とのつきあい方が濃いということは、地域に住む人にとつて川が身近な存在であるともいえます。川の領域ぎりぎりまで張り出した空間を洪水の一瞬だけ切り離す豊堤は人々と川との距離が近いことを表していますし、夕焼け小焼の赤とんぼに出てくる歌詞も揖保川が育んだ龍野が抒情的に表現された証であると思います。また、そんな揖保川を人々の身近な存在であつてほしいと団体をつくつて活動するのは、これから先も揖保川とかかわりつづけていきたいという人々の意思の表れともとれるかもしれません。

人が川の領域に間借りをし、密度の濃いつきあい方をしてきたこと。それこそが流域に住む人々が望む揖保川なのだ、今回の川巡りを通じて感じました。

(2017年11月27〜29日取材)

川名の由来【揖保川】

播磨国風土記の「粒(いひば)の丘」に由来する。村石利夫編『日本全河川ルート大辞典』(竹書房 1979)より。



109



フィールドワーク新企画「発見!水の文化」が好評です!

ミツカン水の文化センターが2017年度からスタートした「発見!水の文化」。従来の「里川文化塾」に比べてより身近で気軽な企画としたフィールドワークです。第3回「船でめぐる東京の水辺～江東の内部河川編～」と第5回「江戸の水辺街歩き(深川編)」の様子をご紹介します。(残念ながら第4回は台風の影響で中止)週末の昼下がり、しかも比較的短い時間ということもあって、幅広い年齢層の方々にご参加いただきました。2018年度の「発見!水の文化」にもぜひご期待ください! <http://www.mizu.gr.jp/hakken/houkoku/>

Webで公開中!

第3回 船でめぐる東京の水辺 ～江東の内部河川編～

—2017年9月23日(土) 13:00～16:30

講師: 高松 巖 (たかまつ・いわお) さん 一般社団法人 まちふね みらい塾 代表理事
阿部 彰 (あべ・あきら) さん 一般社団法人 まちふね みらい塾 専務理事



旧中川のクルーズ風景

開放感あふれるオープンデッキ型の観光船に乗って、日本橋川から神田川、そして隅田川を経て江東区の内部河川を巡り日本橋に戻るというロングクルーズを体験しました。

もちろん、ただ眺めるだけではありません。講師の阿部さんと高松さんから江戸時代の名残、現在の様子、そしてこれからの水辺の可能性についてさまざまなお話をお聞きし、水辺と人の暮らしについて考えました。



日本橋観光棧橋にて



橋の上の人たちと手を振り合う



第5回 江戸の水辺街歩き(深川編)

—2017年11月12日(日) 13:00～16:30

講師: 斎藤 善之 (さいとう・よしゆき) さん 東北学院大学経営学部 教授



万年橋を渡る参加者

好評だった第1回「日本橋編」に続き、講師に斎藤善之さんをお招きして「江戸の水辺街歩き～深川編～」を開催しました。

江戸時代に埋め立てが進んだエリア「深川」は幕府の船庫が置かれたり、物流のターミナルになったりと、さまざまな役割を果たしていました。往時の面影はないところもありますが、専門家の解説を聞き、江戸時代の風景を想像しながら、今に引き継がれる「水の文化」を再発見しました。

参加者の声

「こんなにしっかりしたレジュメをいただけたと思っていなかった。。後で振り返りながら再度今回のルートを巡ってみようと思います!」(女性 20代)

「多くのガイドツアーに参加しているが、ここまで内容の濃いツアーは初めて!」(男性 70代)



新大橋で説明する斎藤先生



深川発祥の地「深川神明宮」



今は公園となっている干鰯場跡



水の文化 Information

■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌「水の文化」では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページからPDFファイルとしてダウンロードできるほか、冊子をご希望の方はホームページの「最新号のお申し込みボタン」からお申し込みいただけます。どうぞご利用ください。

■里川文化塾レポート詳細版は、ホームページで

里川文化塾のレポート詳細版は、参加できなかった方も楽しめる内容です。また、今後の「発見!水の文化」についても、順次ホームページでご案内します。ご注目ください。

皆さまの感想をお待ちしています!

『水の文化』58号について、アンケートにご協力ください。
今後の機関誌をよりよくしていくための参考にさせていただきます。

◆アンケートへの回答はこちらから。

<http://www.mizu.gr.jp/form58.html>



※アンケート用紙をお持ちの方は、FAXまたはメールにて下記へご返信いただく形でも結構です。

FAX: 03-3297-8578

メールアドレス: tokyo-office@mizu.gr.jp

編集後記

「拭く」特集を組む上でイタリア人の同僚と話をして驚いた。鉛筆がべとべとになったとき、彼女は水で洗えない場合は乾いた布や紙で拭くという。それに對して私は絶対に湿った布や紙で拭きたいと感じた。水がなければすっきりと落ちないし、綺麗にならないと思うからだ。一方彼女は、含まれる水分がどんなものか分からない。却って汚れるかもしれないと感じて気持ちが悪いそうだ。綺麗にするには、湿ったもので拭くのがベストとの自分の中にある感覚の由来が、今回取材を進め腹に落ちた。そして綺麗な水で、存分に拭けることの幸せ……。意外な所から水の恵みを感じる企画であった。(松)

去年9月から水の文化センターの担当になりましたジョージ(イギリス出身)です。今回のテーマが選ばれた時に、実を言うと「拭く」なんていったい何が面白いんだろうかと、かなり戸惑いました。しかし、初めて取材に行き、鈴木先生がおっしゃった「今という時間、ここという場所」の大切さにとっても共感を覚えました。拭くという行為は色んな面で意外な役割を果たしているのだと考えさせられよい経験になりました。今後も水の文化センターでこのような発見に巡り合えば嬉しいなと思っています! よろしくお願いたします。(FG)

テーマを見た時、人が汚れや「水を」拭くのだから、とても「水の文化」らしいと思った。けれど、この取材で日本人特有の文化だったのは、むしろ「水で」拭く行為だとわかった。これからは拭き掃除が少し楽しくなりそうだ。(原)

公衆トイレにハンドドライヤーが設置されて久しいが、ハンカチやタオルを忘れたとき以外は使用しない。実際には乾いているけど何か物足りないというか、違和感が残るからだ。それも「触覚」の話聞いて納得した。「拭く」というのが身近な行為すぎて無意識だったが、新たな発見に感謝。(力)

時折、仕事場のガラス窓を拭く。太陽の光がきれいに差し込み、気分が晴れ晴れとするからだ。滞りがちな原稿書きも、窓を拭いたあとは多少はかどる気がする。いまインバウンドが活発になり、寺院で座禅や雑巾がけを体験する外国人観光客が増えていて、なかには靴を脱ぐ生活の快適さに気づく人もいるとのこと。とすれば、何世代かあとには家に帰ったら靴を脱ぎ、床を拭く生活が世界各地に広がっているかもしれない……と夢想する前に、まずは自分の次の世代に、拭くことの意義や習慣を伝えようと思う。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第58号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中埜ビル 4F

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2018年(平成30)2月

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授

古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会

陣内秀信 法政大学教授

鳥越皓之 大手前大学学長

中庭光彦 多摩大学教授

制作

松本裕佳

Fleminger George

青木広実

小林夕夏

原田朱野

吉田奈保子

編集製作

前川太郎 編集

中野公力 デザイン・撮影

蔵田 豊 デザイン

執筆

秋山健一郎 (pp.32-34)

佐々木 聖 (pp.6-9, pp.22-23)

手塚ひとみ (pp.10-13, pp.18-21)

開 洋美 (pp.42-44)

前川太郎 (pp.14-17, pp.24-31)

撮影

大平正美 (pp.10-11, pp.28-31, pp.42-44)

葛西亜理沙 (pp.22-23)

川本聖哉 (pp.3-5, pp.18-21, p.23, p.32)

鈴木拓也 (pp.11-12, p.18, p.33)

中野公力 (p.7, pp.24-27)

藤牧徹也 (pp.14-17, pp.38-41, pp.45-49)

描画

朝生ゆりこ (p.13)

印刷

中埜総合印刷株式会社



ミツカン水の文化センター



表紙:水を含ませた雑巾で玄関の扉のガラスを拭く手。拭くことはきわめて身近な行為だが、その意味を考えたことはあまりないかもしれない(撮影:川本聖哉/撮影協力:昭和のくらし博物館)

裏表紙上:清冽な井戸水に浸した雑巾を手で絞る。水の冷たさに身が引き締まる瞬間だ(撮影:川本聖哉/撮影協力:昭和のくらし博物館) 下段右上:目覚ましい普及を見せるスマートフォン。常に持ち歩くため、衛生面を考えて拭く人が増えている(撮影:前川太一郎) 右下:台の上を拭く小学生の手。子どもの頃の習慣は、大人になってもなくなるはずだ(撮影:藤牧徹也) 左上:人間が身につけるアイテムのなかで、メガネは拭く頻度が高いものの一つだろう(撮影:藤牧徹也) 左下:車のフロントガラスを拭く。水洗いでは拭いきれないオイルなどの汚れは化学繊維で拭きとる(撮影:前川太一郎)